翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書（一）
― 手錢記念館所蔵俳諧資料（二）―

伊藤　善隆[a]

[a]湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】
俳諧　手錢季硯　広瀬百蘿　向井去来　水鶏坊空阿　『誹要辨』『〔竹翁伝書〕』『蕉門発句十五味』『極秘誹諧初重伝』

はじめに

本稿は、島根県出雲市大社町の手錢記念館に所蔵される俳諧資料の中から、『誹要辨』（写本一冊、元文四年奥）、『〔竹翁伝書〕』（写本残欠、元文六年奥）、『蕉門発句十五味』（写本一冊、宝暦十年奥）、『極秘誹諧初重伝』一（写本欠一冊、成立年次等不明）を翻刻紹介する。

出雲国大社の手錢家は、貞享年間に大社に移り住んだ喜右衛門長光（寛文二年～寛延二年）を祖とする商家で、町役の大年寄を長く勤めた。歴代の当主は文芸にも関心を寄せ、和歌・漢詩・俳諧に熱心であった。なかでも、三代目当主である手錢白三郎（正徳二年～寛政三年）は、白澤園季硯と称し、徳園人冠李と称した弟の兵吉郎（享保四年～寛政八年）と共に俳諧活動に力を注いだ。

さて、出雲俳壇といえば、去来の伝授を受けた広瀬百蘿（享保十六年～享和三年）の存在が注目される。すなわち、大礒義雄氏が、『岡崎日記と研究』（未刊国文資料刊行会、昭和50年10月）、「高見本『岡崎日記』『元禄式』の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅」（『連歌俳諧研究』87、平成6年7月）で報告されたとおり、去来の甥である空阿（水鶏坊と号した。大礒氏は去来の庶子かと推測されている）から伝授を受けた人物である。

百蘿（百羅とも記し、茂竹庵と称した）は、出雲大社の社家（千家家の代官役）に生まれたが、その母は手錢家の二代目茂助長定の娘であった。また、大礒本『岡崎日記』を書写したのは儀満持矩だが、その儀満家と手錢家にも縁戚関係があったという。

とすれば、百蘿が京都から出雲に持ち帰った伝書類は、季硯や冠李ら手錢家周辺の大社の俳人たちの間でも伝授や書写が行われたと想像される。実際に、復本一郎氏「蕉風伝書における「皮肉骨」についてのノート――『伝書古池之解』を紹介しつつ――」（神奈川大学『国際経営論集』1、平成2年3月）によれば、学習院大学宮本三郎文庫に儀満持矩が書写した『伝書古池之解』が所蔵されていること、同書は百蘿が空阿から譲り受けて持ち帰った伝書を書写したものである可能性が高いことが指摘されている。

手錢記念館に所蔵されている伝書にも、百蘿が嵐白に与えた『蕉門発句十五味』が存在する。嵐白は、俗名等は未詳ながら、季硯、冠李と俳席を共にした人物である。

また、記念館には、去来・空阿に由来するもの以外にも、いくつかの伝書が所蔵されている。すなわち、比較的古い伝書には、淡々系のものがある他、その時代や系統が明らかでない伝書もある。

つまり、手錢記念館に伝存する伝書を調査することは、去来・空阿の伝書の伝播を明らかにするだけでなく、大社俳壇（出雲杵築俳壇）の実態や、蕉風俳諧の地方へ浸透の様相を明らかにする端緒になると考えられる。本稿で翻刻・紹介する所以である。

〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補い、改行を改めた。また、片仮名は適宜平仮名に、異体字は概ね通行の字体にあらためたが、一部原本の表記を残した。

コト、ヨリ、トモなどの合字は、それぞれ「コト」「ヨリ」「トモ」などと記した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに　」をつけ、（　）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（ママ）」を付した。

難読の箇所は□で示した。また、虫損により判読が困難な箇所には、その傍に「（虫損）」と付した。

参考のため、原本の図版を最後に示した。

一、『誹要辨』

〈解題〉

元文四年五月、淡々門の不識庵節山が、出雲滞在中に杜千に与えたもの。一三丁裏以降には、節山の句がまとめて収録されている。杜千については、俗称や履歴は未詳ながら、序文中に「雲陽杵築の風才杜千、若しといへとも此道に篤実あるを感し、その需に応して師弟譲墨の約をなし」たとあり、出雲滞在中の節山に入門したことが分かる。また、沾耳坊編『梅日記』（延享二年刊）には、「出雲大社」と記して、杜千・柳波・五溪・冠李・関山による表六句が載ることが確認できる。手錢記念館に所蔵される伝書としては、古い時期のものの一つである。

〈書誌〉

書型……横本。写本一冊。仮綴じ。間合紙。

表紙……欠。第一丁の大きさは、縦一九．〇cm×横一三．七cm。

序文……「元文四年夏五月下浣／不識庵節山、杵築の旅館にして序す」。毎半葉一七行内外。

本文……毎半葉一八行内外（一三丁裏以降は、一四行内外）。

字高……一七．二cm（本文巻頭「一中古以来の……銘々」（三丁表）を計測）。

丁数……一八丁（墨付き一八丁）。

奥書……「時章折々の句、少し書と、めて／書おくもかたみとなれや筆のあと身はうき草の流れ行とも／此古歌も思ひ出られ候。以上／不識庵［花押］／杜千丈」。

〈翻刻〉

誹要辨

夫、浦安誹諧の道は、やまと歌の一体を用ひ、史記滑稽の姿を学ひ、山崎宗鑑法師、園田長官守武よりそ、附合の事をはしめ、連歌の古式を以、百韻歌仙の定法とす。松永貞徳翁に至り、道盛んに、門葉蟻のむらかることく、その門々をかまへて教へを興す。中にも、北村季吟、独リ風月の真を得たり。時さかんに、世とよく移り、芭蕉翁流れを汲ミ、源を究め、あつく恵ミ、広く」（01オ）おこす。晋子に到り、猶その肉をけつり、骨を換、底なき器に万物を捧ヶ、火中に水を得るの誹曲、そのかみに超越せり。晋子世を去り、蕉翁末弟の族、こも〳〵世に鳴る事多しといへとも、嵐雪の外は、或はをのか文才にたかふりて、誹意の真を失ひ、または不才の徒、俗談平話のおふむねを知らす、野烏の声〳〵、市にかまひすし。誠にかなしむへし。爰に、吾老師、壮年の比ほひより世業を捨て、東武に遊ひ、

晋子の門に入りて、彼三千丈の溜底に投たる筆妙も知らすして、その妙処を得、京師に卜居」（01ウ）する事二十余年、たへたるを継き、廃たるを発し、遠境近邦の好士、その下風を慕ひ、其流れをくむもの、およそ三千余人。夏草のしけ〳〵しく、養気のいとまなきをいたみ、点格を竿秋に譲り、難波にかたつふりの庵をもとめて跡を市中に隠すといへとも、人何そゆるさんや。予かたくひの一端をも弁へさるさへ、此道に友富ミ、幾内東海の花月にさまよひ、南海北陸の寒暑を凌き、いそのかみふるき世々の歌人のなかめを残セし国々の名所を見よこし、貴賤尊卑の好士に交りをむすひ」（02オ）、故郷を旅とし、旅をまた故里に思ひなして、生涯無為のたのしひを極る事、仰けは住吉北野の加護、おもへは老師の芳名世に高きかなすものなり。今、雲陽杵築の風才杜千、若しといへとも此道に篤実あるを感し、その需に応して師弟譲墨の約をなし、はた当時流行せる俳書やうの取捨すへき事とも、折にふれて思ひ出るにまかせ、あへて文事をかさらす、是を筆記して、浜の真砂をひろふ一たすけにもあらまほしく、あたふる所、左にあり。

」（02ウ）

元文四年夏五月下浣

不識庵節山、杵築の旅館にして序す。

一　中古以来の去嫌ひ等、銘々の料簡工夫を添へたる書は、違乱はなはたすくなからす。唯貞徳の御傘を以て正とすへし。四季の事は季吟の増山井にくはしく見えたり。他をもとめてさらに」（03オ）詮なき事そ。

附たり。彼岸、社日、出替り、勧学会、ひいな祭リ等の春秋にある物、古来は、後と歟秋とかなくては、秋に用ひす。当代、秋の句に付るときは、右の字なくても前句に引れて秋に用ゆ。古書に洩れたるは、阿蘭陀者に用ゆ。尤日本の句体たるへし。京師へ二月初午の日にきはめて来るゆへなり。宗門改は、九月也。是も、京のあらため、九月に有るゆへなり。又、絵踏とすれは春也。是も、九州に切支丹改に絵をふます所あり。春なるよし。

」（03ウ）

一　誹の漢句、又は俗に用ゆる遠き世話字に、いろ〳〵のよみ方を附て句に用る。当時、下京又は辺鄙の誹に多し。決て不好事也。恋の句、新古の姿大きに異なり。一編に恋の詞字あれは、恋なりとおしへる人多し。たとへ契り情やうの慥なる文字遣ひたりとも、友と契り、旅の情、人の情の句、恋になるへきや。尤、謎なとは、ふるき書に恋の中には入らねと、おふかた当代恋に用ゆ。たゝ、心の恋こそ肝要なるもの、句おもてに恋のこと葉姿なくして、恋になる。和歌にも、

余所にのみ見てややみなんかつらきや

高間のやまの峯のしら雲

」（04オ）

音羽やま音に聞つゝあふ坂の

せきのこなたに年を経る哉

是ら、皆恋の歌にいれり。

誹ノ先哲、おふく教へを残せり。

〻用の状しやと箱ともに投け

〻蹴ていたしかぬ程に成ぬる

〻此うへは鑓の提たき願なり

〻革足袋にはしめてさはる□□の日

是ら、句情に工夫をつけは、得て聞へし。老師、恋の附句に、

〻塗ッたので旦タいやしきうとん桶

ひとゝせ予も附恋の句に、

〻水持テと屏風のうちに花の声

大略、此格をもて工夫有れ。

一　鳥獣の恋は恋にあらされとも、猫も恋、鹿も恋、鳥も恋なと、ものかんなを入れて用る時は、皆恋也。」（04ウ）

一　四季の句も、表にその季の文字こと葉なくても、句意、その季に落着あらは、一しほ可ならん。キ角、盛暑のワキに、

とひ〳〵に居て灯を遠く置

その時候、得て聞へし。

基佐、春の第三に、

我影を妻歟と月に鹿鳴て

まことに第三体、千歳の眼目とも云ふへし。

隠岐との、かへり見はやせ鏡山

キ角、三月の句也。

塚も動ケ我泣声は秋の風

はせを、春の追善也。

笠買ふて玉ふむ沖の田植哉

竿秋、汐干の句也。

町は秋けふそ苫家の花紅葉

予か汐干の句也。」（05オ）

此たくひ、当時の佳句かそふへからす。一途に物を心得へからす。また、是らに迷ふて不落着の句もなすへからす。句到ツては、曲節の自由になる事、心の侭なるものそ。

一　孕ミ句をこしらへ、附合の場所宜きを見合入るゝ事、好ムへきにこそあらす。又、嫌ふ事にてもなし。歌にも、伏柴の加賀、能因か白川、国基か帰厂、皆同意也。目にふれ耳にふれたる事に頓意の趣向あらは、不捨して作り置、能き処にて用ゆへし。必当意即妙の佳句あるもの也。平日、誹諧を」（05ウ）心に捨ぬ、ひとつの徳なり。

一　中古以来、たゝさし合の事をつふさに覚へてのち、句を作る事を学ふ。甚愚なる事也。古人も、さし合くりといわれんよりは、句者と云るへし。さし合は、人より改ム句は人よりなすへからすと。尊むへし。一座さし合の句は、老匠功達のものよりあらたむ。たゝ幾たひも句を達者に作り、席をかさねる時は、習はすして知るへし。惣別、恋にかきらす、神釈生類等の詞ありとも、句体別れて、たゝ句の用にのみ」（06オ）かり用ひたるは、面にても少も嫌ふへからす。

からた倒しまかなひ親仁仏にて　羅人

第三也。尺の心更になし。

僧うたひ出る三の松原　節山

四句目也。是又能の句にて、尺の意なし。大略思ふへし。

一　句を作るに、附け心よく叶ひても、三句のこし悪きは無念也。打こしをよく離るゝ心は、中くみの句に而も、第三をすると心得て句を工ミ作る時は、いつとても打こしのはなれよし。たとへ、一句絶唱たりとも、こしとつけあしくは、麁句にをとるへし。三句の輪廻をはなれるをもて、祈祷にも」（06ウ）追善にも、又人倫平日の心持にもなる事とそ。むかし、去ル大名、其御子へ対面の時は、其侭にてあひたまひ、孫にあひたまふときは、座を正しく、頭巾なと下におきてあひたまふを、外よりたつねけるに、子は我に近し、孫は遠し。礼なくては有るましと。此心、俳諧の三句のわたりに、かしこき心得成るへし。

一　居所、山類、水辺、神尺、何によらす一句の五七五に一いろをもて作り立たるは、曲流なくして甚つたなし。又、時候の」（07オ）句も、同し一句に季を重ねて用る事、当時不好。尤、巧達のもの、其心得にて季重りの句を今もつくる也。決して心かけまし。道至りて天然と得るもの也

一梅に鶯をつけ、卯花に時鳥、柳に鞠、猶此たくひ、対して古来附ヶたるもの、甚ふるし。いつまても、句は附と附ぬの境ひを、よく心得へし。心にいか程工ミても、句表はそれを見せす、すら〳〵とすへし。たゝし、斯くいへはとて、一ふしなくては連歌めき、又は誹ありても古風の一体に落るものそ。」（07ウ）

一附句は、楊弓の矢のことし。中リたる矢は、的をはなれて有るもの也。あたらさる矢は、的の下にあるもの也。然れとも、中らさるなりと。老師の文談儀に、盲者の杖なり。必、古人名匠の句は、ヲモテは不附して、心はひしと前句の的中にある事、顕然也。よく眼をつくへし。

一金銀等并食るひの句、多く野なるもの也。心を付くへし。尤、誹の一体なれは、しゐて咎る事にもあらす。しかれとも、白はし、白かみ、白米の類ひ」（08オ）、白味噌といへはいやしく、糠みそといへは尊し。此たくひ、つと〳〵記すにいとまあらす。能く達スへし。たとへ句に俗語ありとも、心やさしきは、誹の秀情とも。

〽蚤虱馬の尿こく枕もと　翁

口きりや汝を呼は銀の事　キ角

是らをもて、古人の活気をさくり知るへし。

一古歌古詩等のこと葉を句に借りつかふ事こそ、此道の第二義也。たゝ眼前の境界、世に用る流行のこと葉すかたをゑらはさるこそ、誹曲の専とも」（08ウ）いふへし。是、所謂俗談平話也。古人も、行やすき大道にして入かたき大門ありと、をしへたまふ。連歌より出て連歌をきらひ、詩歌の道をはなれる事、此道をあまなふ肝要なり。いにしえより書記に伝ふる用ひ来りの古詩古歌の時候は各別、新タに詩歌の時候をもて誹諧を違乱すへからす。牡丹は既に詩歌共ニ春にて、勿論やよひに花咲事なれとも、誹のみ初夏に用ゆ。此ひとつを」（09オ）以て、余は悟るへし。

一生類、草木等の、異名を好む、流々当時愈お、し。拙き事也。歌連歌は知らす。誹には、たゝ梅はんめ、さくらは桜、鶯は鶯とするこそ、誠の平話なるへし。尤、異名を遣ひて、本名よりは句意よく調ふは一興たるへし。さあるは、百にひとつも得かたきなり。心得へし。

一風といへは、吹と字を重るに及す。此たくひ、略して聞る句は同し詞のかさならぬ、あらまほし。撞といふ字に」（09ウ）鐘をきはめ、擣ッと書ヶは砧にかきる。当時の発明也。一字にてもあたなるは詮なく、尤、句もあしきもの也。

一伽羅は恋也。しかれとも炷く心なくては、是又恋にあらす。一途におもふへからす。きやう枕、懐中伽羅のたくひ也。炷くの字を書ヶは、伽羅に限るそ。

一同季は五句去リ、極りたる事也。しかれとも、夏冬の句は、百韻なとには、一所なとは三句去りにありても不苦。是には、すこし子細も有りと心得へし。

一花の滝、花の浪なと、或は山類」（10オ）、水辺にきらふなといふ事あり。是は花の咲下りたる姿を滝と見なし、又は浪立たるさまを浪といふのみにて、山水にすこしもかまはす。雲の峯といふとて、山るひにきらふへきや。余は、例して悟るへし。

一何によらす、ひと表のうちに三ところ有るは、恋にても、時候にても、あしゝ。勿論、一句にて捨る山水神尺のたくひは、三句去らはいく所ニ而も不苦。一句にて捨ぬものは、しゐて二所より余慶はあるまし。かたく見へて、懐帋の表あしき」（10ウ）もの也。惣別、第一ニ懐帋のうち、見の興あるこそ作者の本意の事なれは、平日その心得肝要也。

一　神社仏閣ニ到りての句、又奉納賀祝詞等、追善に到るまて、ほ句、とかく疑ひの心なきやうに治定するこそ宜しかるへし。また、人に挨拶なと、あまりに先キを尊ミ過たるは、還而へつらひかましく、拙し。たゝ、先キの人により、尊キをいやします。又、我よりかろきをも、等輩にする本意也。わきをする迚も、其意肝要也。たゝ、即興即事の」（11オ）ほ句抔に、句むつかしく遠きを求め、くた〳〵しく聞えにくき、詮なく無興成るものそ。目前の事こそ、むかふへもあいさつなるへけれ。先キを尊ミ過るも、又我をいやしみ過るも、同しく拙く、得て虚句に落て実情うすきものそ。具に記すに及す。日に増し、合点ゆくへし。

一　何は何に似たると、ほ句并に附合にする、甚ふるし。見立の句は、決てせぬやうにすへし。」（11ウ）

右、思ひ出るに任せて、爰にしるす。その余は、一隅を以三隅は知るへし。世々の撰集、俳書、歌書等にあらはれたるは、記するに及す。たゝ、ものに洩したるをひろふのみ。此一毛をも、広く渡りて窮ひえ得る日は、九牛のかすを尽すに何のかたき事あらんや。風雅を心かけるものは、かりにも我執をはなれて、我を人とし、人を我とおもひ、をのれ達せんと思はゝ、先ッ人を達せよ。人また斯くの如し。ひとりして万物とゝなふ」（12オ）へからす。能く弁ふへし。活気を以道を学ふときは、千里も一瞬の外になく、万境我心内に有りて外になし。見ぬもろこしの事をも、遠きあつまの空も、爰に遊ふに何んそ外ならんや。只願ふらくは、日新の功、日ならすあらはれ、風声都鄙にあまねくひとしからん事を。風子も、またよく予にひとしく忘るゝ事なかれ。猶うたかはしきは、人にたつねて是を明らめ、我知りたるは、人にも又斯く」（12ウ）のことくさとし、互ひにさとし、たかひにみちひく時は、その中に我師あり。いかはかり心にありとも、尋る事になつむ輩は、生涯心に明らむる期なかるへし。器用さと稽古とすきと三つのうち
　好こそものゝ上手也けり
晋子の戒制、行住座臥に忘る事なかれとしかいふ。」（13オ）

予、年来時候の句々、思ひ出るに任せて、余岱に記す。

さいたん　節山

もろこしやされと初日のもすそ哉
にくまれす世々の恋くさ初烏
今朝立ッや茶から霞の朝日山

若菜

野ゝ数も道も若菜の都かな
日は人の日なり芹生野菜摘川」（13ウ）

んめ

あるしある歟梅に巾架の捨小舟
礼云ぬ茶にむかしあり日枝のむめ
埋れ木の井筒に人の野守かな
峯に名を埋ぬ梅や万戸侯

早春野望

とし玉や籠に寝る子によしの川

春興句々

菜の花に町は拙し鐘の声
菜のはなや牛のどくろの橋柱

八嶋相引にて

感状は陸に残りて筆ッ花

弦うち山

日の射る歟弦打やまに雉子のこゑ」（14オ）

和歌浦にて
筆捨る誓ひにふかし浦の春
よしの川にて
妹と背の中に孕むや鮎の雲
汐干
干るや今か俵藤太か娶り道
町は秋けふそ苫屋の花紅葉
汐干かな何をあふみの浦子共
上巳
さかつきや桃に流さは三千里
踏かふる馬を埋ムや山さくら
ならにて
塔二ツむかしの春のひかし山
ひゑい山ニ而
三千ミチの道尽ぬ灯や桃の花
高野大師廚前ニ而
雨露知らぬ花や無漏地の杉の雲
たへま　中将ひめの像
海棠や二上嶽の雲みる日
よしの落花吟
心あらは捨リ草鞋も花の茎
満花の春にあひて
巡り来て花なき山の梦路哉
西行苔清水にて
とり〳〵の水ミかさ増るや花の滝
花
夜を捨ぬゆきゝも花の光リ哉
」（14ウ）
」（15オ）

かくるゝや君子の徳も花の昼
落花吟
四下リ川のひま行く春の匂ひ哉
更衣
時うつる雲歟端山の白重ね
同しく旅にて
その侭の身はしら雲を袷かな
子規
我恋は瀬まくらにありほとゝきす
加茂川の水は兎もあれほとゝきす
魂ならは裾を着る夜ハほとゝきす
いつ初音庵に三会の閼伽枕
暁に一声聞て
初音かな世のきぬ〳〵のうしろ髪
粟津翁の廚前にて
日は苔に石も玉巻く光リ哉
端午
鳥か羽初かたひらの嵐哉
同しく雨ふり又晴れたるに
雨と日の梳スくやあやめの乱髪
盛暑
地底の草刈て居る暑さかな
夏草にしけ〳〵飢て牛の声
納涼
明日あらは笑へ凉ミの歌扇
新凉
ひと重脱く木々また凉し水の音
」（15ウ）
」（16オ）

星夕

二度あらはうき世に落ん銀河
夕月も朝かほ姫のつほみ哉
借ものも七夕も常の旅枕

魂まつり

魂棚や元ト(ト)の雫の道しるへ

八朔二章

朔日や八束も民のたつか弓
竜田ひめの手きははしめや木具行器

良夜

暮て又餌にあふ鳥も良夜哉
米つくや賤も兎の光リ哉
岑こよひ人を細引や月の海

重陽

出来菊は知らす久かたむら山家

同しく病後吟

一ちから薬も菊の山かつら

後桂

玷(カケ)たるも玉の手からや十三夜

秋情

世の秋は暮てしはらく寺林
野かへりの鍬に袷や秋のいろ

初冬吟

茶か咲て人にねさめのまさりけり

しくれ

□なき夜鶯はつるむ歟一時雨

京にて

ゑひもせす京も時雨のかりの宿
」（16ウ）

碧(スリウス)の哥もしくれのまこと哉
笑はすに女は帰るかれ野哉
水仙や都をうなの夜をひとり
かほ見せや世のうき節の帰り花

ゆき

常は見ぬ梢も雪の光リかな
さして来る雪見を志賀の貴人哉

歳暮

綰(ワカ)ぬへき枝なし年のあくた川
江島に宿札うたは今宵哉

旅にて

とゝまらす行す師走の忘れ水

年内立春

野はもえて海に入日の寒さ哉

時章折々の句、少し書とゝめて

書おくもかたみとなれや筆のあと

身はうき草の流れ行とも

此古歌も思ひ出られ候。

以上

不識庵

杜千丈　［花押］

（白紙）

」（17オ）
」（17ウ）
」（18オ）
」（18ウ）

二、『〔竹翁伝書〕』（残欠本）

〈解題〉

奥書に元文六年二月の年記がある竹翁の伝書。竹翁については未詳。『誹要辨』と同時期のもので、手錢記念館に所蔵される伝書としては、古い時期のものの一つ。内容は『梧一葉』（享保十六年刊）とほぼ重なるが、本文には異同が多い。

〈書誌〉

書型……横本。写本、零一冊。間合紙

表紙……欠。第一丁の大きさは、縦一七．五cm×横二五．〇cm。

本文……毎半葉一七行内外。

字高……一五．〇cm（一丁二行目「一　めり……かり」を計測）。

丁数……七丁（墨付き七丁）。

奥書……「右蕉風甚秘之目録伝は其厚志より伝之／かならす他見他言有間鋪者也／蕉門老人竹翁／元文六のとし二月上旬」。

その他…七丁分が残る残欠本。綴糸は失われており、七丁を重ねて軽く二つ折にした状態で保存されていた。よって、丁数は仮に記したものである。なお、05オには、空白部分の紙に、文字を記した紙を継いでいる箇所がある（参考図版参照）。また、01オ「咲ッ」の「ツ」、03オ「治定の」の「の」、03オ「豊の」の「の」は、それぞれ朱筆で書かれている。また、04オ「さはらはぬ」は、「さくらはぬ」の「くら」を見消チにして「はら」としたものだが、あるいは「さはらぬ」の誤記かと思われる。

〈翻刻〉

つるといふをつめたる也。花咲つるといふを、るの字を捨て、咲ッといへはきるゝ心也。聞つると、るの字添れは、語絶せぬなり。いつれも、下のるをいはさる所におゐて、切字なるなり。

一す、古来もまれなる切字也。大方は五七五の留りに置字也。切字の下に心なき物を置てはとまらす、切す。月、雪、花、ほとゝきす、桜、柳、梅なとの景物を置へし。

一よ、かろき下知也。又、それよ、かれよ、と片付たる心も有り。

一せ、くたしたる下知也。いやしめたるに似たり。そめつくせ、なとは下知の外にて、染尽しこそすれの心也。すれの反しせ也。そめこそつくせ也。　」（01オ）

一れ、これ下知にも自にも有り。氷レたゝ自、雪もこそふれ自、一しめり降レ下知、急て帰れ下知。かくのことく下知も自もあり。味ふへし。

一へ、下知にも自にもあるへし。添るをそへといふも、我心花にこそへなとは下知にもあらす。く食へ、い日へ、おもへ、なとゝはかろき下知也。

一け、是又、吹けあらし、花になけ下知、あらしこそ咲け自、花にこそなけ自、如此、能〳〵工夫すへし。

一いかに、問せめたる心、又うたかひにもなるなり。味ふへし。右十八字のて尓は能流通あるへし。　」（01ウ）

一かな、もかなより出る。

一めり、たり、せり、れり、へり、かり、けり、出る。

一けりな、あらしな、かしな、たしな、やな、ならし、らんより出る。

一こそ、ヱケセテネヘメレの相通ならてはとまらす。鐘をこそきけ、釣をこそすれ、善をこそなせ、恋こそはせね、なとはそより出る也。

一なり、なりけり、なる、といへは切字ならす。

一いつれ、いつこ、いつら、いつち、いつ、いつか、いく、いかゝ、いかん、いかに、いかにせんを下にいはす、いかゝせんを上に置す。常〳〵ある事なれは、考知るへし。

一涼し、嬉し、かなし、いとし、」（02オ）なつかし、ゆかし、こひし、なとは、キクシウ、すゝしきといへは、語絶せさるゆへ切れぬ也。きの字、いはて切るゝ也。

一あなはかな、あなたうと、うたて、あやな。是も、やの字を云へは、切字にあらす。

一大廻しといふは、下より上中へまはして、むた字のなきやうに廻転する句也。

一を廻しも、に廻しも、ひとし。何をと、何にと、廻転すへし。

一外に子細なし。

一玄妙の切字、是は三所に切字有ル事也。其用に立ッ一ッを切字也。あとふたつの切字は、て尓葉也。しかし、甚秘ある事也。

一三段切は、風情成ルもの五七五に（02ウ）ならへて作意あるへし。

一治定のらんといふ事、置字はねる事。其事を上に尤と理をせめていひたるは治定也。

　　豊の秋ちまたの竈厚からん

厚かるへしと也。

一に留、現在、過去、有。とおもはぬに現、とおもひしに過、云流すにあり。上に、少もうたかひの詞ありては、にと留らす。

一にて留、置字、をは、はも、からぬ、外に、なを、さへたに、此押字なけれは留らす。

一上下の句、過去のし文字にて留る事、法外たり。今世間の句を見ルに、過去しにて留たる多し。一向盲俳師のなす事也。考ふへし。」（03オ）

一見ゆ留、大方短句たり。見ゆ、の上に置字、フルムリスシツは、古来の掟也。当世には声にては不好候へは、蕉風掟にはウクスツヌフムユルの相通ならては留らす。たとへは、人の来る見ゆ、鳥の飛ふ見ゆ。人のくる見ゆる、鳥の飛ふ見ゆる、とはいひかたし。鳥のとふ見ゆと、るの字をいはぬ所に風流あり。涅槃仏見ゆ、月の舟見ゆ、梅の花見ゆ　これは何事もなく、れるの字をあましたる也。惣体、見ゆとめは、上に風流なる物、面白き事をいひてとむへし。

一下の句かなとめの事、何の子細なし。くり返して吟するやうに仕立ル事なり。目鼻たちまて利口なる哉〳〵と打かへしたるて尓はならは、留るへし。

一下の句て留り、古来より言ことにはせぬ様に秘事せり。下の七もしに風」（03ウ）流成ル物いふ也。上七文字には何云てもくるしからす。下の七文字にて、雪はふりきて、松は高ふて、花はにほふて、かくのことく句つくりて、〳〵はの字にておさへる也。

一下の句、つゝ留は、かきりなき事にいふ言葉也。一度はかりの事にはせんなし。我ころも手は露にぬれつゝ、雪はふりつゝ、やくやもしほの身もこかれつゝ、もの思ひつゝなとゝ、数かきりもなき心也。連俳ともに、一句の中に風流成ルもの云立ねは留らすと也。

一下の句に留かへすて尓はなるゆへ、上七、もし打かへしても、同し心に聞ゆる様ニ仕立ル也。それ故、腰のかもに、文字入て句作なり。雪は尾上に、雲はふもとに、なとゝ句つくりたる也。これも、はの字にておさへ候かよし。雲は禁に、といふ心なり。」（04オ）

一すみのて尓はの事、毎〳〵に有リ候事なれとも、分て第三の事

也。是もはまらぬて尓は也。いひつめたるは、はまるて尓葉也。すかた浅くいやしからん。たとへは、あふ坂の関のあらしに袖さへて、と有を関の山風袖さへて、とにの尓をあましたるこそ本意ならめ。すみのやといふも此心也。

一　をは、をなをして、のにせよとなり。のゝ字はいくら入ても句にさはらはぬ物なり。をは、はととめて聞ゆる事もあり。かけはさやけきを、かけのさやけき、なとの類なり。

一　のとめは、前句にきせて尓葉とて、能〳〵かよふやうに仕立ルかよし。大かたはせぬかよけれとも、一句の仕立てより、のかれかたし事あり。」（04ウ）

一　賦之事は世間に有ル事なれとも、連続計にては取りにくき物なれは、」（05オ）かす多く覚（ヤマ）語有へき事也。

一　一字露顕は　木ヲ気ト取リ香ヲ蚊ト取ル也。

一　二字返音は　松ヲ妻ト取ル類ニて返ス音也。

一　三字中略は　はかまヲ浜ト取ル類也。

いつれもヶ様事也。又余にもとらは、

一　除扁は　松ヲ公ト取リ、明ヲ月ト取ル。

一　他添は　春ヲ椿ト取ル類也。

一　連続は　梅ヲ鉢ト取リ、花ヲ餅ト取ル。

右ヶ様の事也。さま〳〵工夫有ルへし。

掟

一　連俳ともに、付合肌の事は大事あり。前句を離すして、しかもはなれ〳〵て、はなれぬやうにあるへし。いかに句からけたかくかさりたりとも、前句へこゝろ」（05ウ）かよはすは、不和成ルいもせの如くにして、家をなすへからす。又、いかに付たりとも、前句野賤に下りなは、其句主の心からまて花咲かぬ事に成りぬへし。よくのき心かよふたるこそ、めてたくおほゆめれ。是をたとへはいはん、蓮の茎を引折て見へし。きれ安くして、しかも其糸たゆる事なし。其如く、打越をのかれ、前句の心を捨るは、蓮のくきを切に実ならす。さて縁の方、葉心よくかよはゝ、寄勢合いとつゝけるか如く、此道の大事とする所、尤可賞。

五尺のあやめ

一　一句仕立は五尺のあやめに水をかけたらんかことく、池水よりする〳〵と出たるか如く、きよらにとゝこほる事なく、たけも高く、口にさはらす、ゆう〳〵と仕立」（06オ）たらんにめてたき句成ルへし。

夜のはしら

なれぬ所に寐て、くらきにふと起テは、まとひぬるもの也。昼、東西南北の目当の柱を能覚へ、夫にすかり心をしつめぬれは、東西はしるゝ物也。其ことく前句のすかる事をよく吟返して、其主たる所をもとめ考ふへし。

乞喰ふくろ

一　乞喰のふくろは、ふたつ持ぬ物也。ものをきらはす、あたふるにまかせて一ツ袋に入、用に隠してゑり分て用ゆ。和歌の学問これにひとし。あらゆる所の世事、唐大和の言くさまて見聞して、しゑて用ゆへきにあらねと、みな〳〵ふくろへ入るへしと也。」（06ウ）

人のかほはせ

一　人の顔に七穴二眉そなはりし中に、美目のよしあし、顔の大小長短、色の黒白、眼口あきやう、鼻のつきやうとによる物也。連俳是にひとし。十七、十四の文字数もかはらす、寄合縁方とても同物なれとも、其内、てには、あとさき句のもよふによりて、作あり。上下より申ふるしたる事はめつらしからすとも、本躰もなきむたこと申さは、横に鼻のつき、たてに目のつきたらん

かことし。今時の俳盲如く成ルへし。考ふへし。

右五躰は連俳之名目、宗匠之覚語すへき事也。

一　揚句は宗匠役之もの也。ほ句も心をよく考へて花にもひたしみ、発句の」（07オ）心もはなれぬやうに仕立候へし。

一　序破急の事、面の句より二ノ折迄序、三ノ折破、名残折急、是百韻の法也。今時盲俳師、初折にてけやけき事をいひ、名残の折におもたくらしきくらゐある事いひ出して、判を請に長短の点を引、まことに一盲衆盲をひくとや。笑らん。

［印］

右蕉風甚秘之目録伝は其厚志より伝之。

かならす他見他言有間鋪者也。

蕉門老人竹翁

元文六のとし二月上旬　［印］［印］　」（07ウ）

三、『蕉門発句十五味』

〈解題〉

宝暦十年十月に、広瀬百蘿（茂竹堂）が嵐白に与えた伝書で、発句を「十五味」に分類して論じたもの。嵐白の俗称や履歴は未詳である。ただし、手錢記念館には、季硯や冠李たちの作品を書き留めた『葡萄棚』（巻之二、欠一冊）と題する写本が伝存しており、そこには、

見て置ん娵取よしを初暦　季硯

注連も緑を結ふ門松　嵐白

鶴に又蝶の折かた春めきて　冠李

という発句・脇・第三が載る、また、同書には、嵐白の発句が五句収録されており、季硯、冠李の兄弟と親しい間柄であったことが想像される。

なお、繰り返し指摘しておけば、本書は、去来・空阿の伝が、百蘿から出雲俳人へ授けられたことを示す資料として、注目すべきものである。

〈書誌〉

書型……大本。写本一冊。仮綴じ。楮紙。

表紙……本文共紙。縦二六．〇cm×横一八．五cm。

外題……表紙中央に「蕉門發句十五味」と打付け書き。

序文……「此一條は、落柿舎の秘蔵にて、長く記録にかくされしかとも、今あらはして嵐白子に伝ふ。必他門に漏脱あるへからす」。

本文……毎半葉九行内外。

字高……二〇．〇cm（序文「先師空阿翁……落柿翁の」を計測）。

丁数……五丁（墨付き五丁。ただし、本文は、本文共紙の裏表紙見返しまで書き込まれている）。

奥書……「右は我家の秘訓也。此外百五十味の細註あれとも、先此十五味を細看せは、始めて発句の意味をしるへし。他門に対して論すへからす／宝暦十辰十月十二日／茂竹堂／嵐白風人」。

〈翻刻〉

蕉門発句十五味

此方ひかへなく候間、御覧後、

京都へ御もとし被下候（虫損）　」（表紙）

（白紙）　」（表紙見返し）

先師空阿翁曰、我家に発句十五味といふ事ことあり。落柿翁の伝にして、蕉翁の秘訓也。古翁生前に、去来、丈艸、両叟へ伝りて、其余にはしるものなし。すへて古翁の案方は、此十五味を本として、千変万化する処也。是をしらされは、発句に風雅の実情を弁へす、正風の句のおもしろき事なしと、云々。此一條は、落柿舎の秘蔵にて、長く記録にかくされしかとも、今あらはして嵐白子に伝ふ。必他門に漏脱あるへからす。

発句十五味　」（01オ）

寂味（サビシミ）　笑味（ヨカシ）　悲味　閑味　哀味
凄味（スゴ）　寒味　暑味　長閑味　面白味
悪味（ニクク）　涼味　憐味　剛味（ツヨ）　暖味

十五味語句并解

寂味

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

万物の味は面に出ず。すへて其物の内にふくむ物也。寂しきを」（01ウ）淋しきと打出し、面白きを面白しと打出しては、正風の諷諫（虫損）にかなはす。他門の異風は、其美味をこなたより附用ひて、世上の耳を諂へとも、蕉門の正風は人力細工の風味を取す、天地自然の風味に遊ふ。是を蕉門開眼の俳諧にして、他門のしらさる処也。此句淋しとはいはねとも、見渡す処の風景、暮かゝる空の淋しき事、句中に千万の□（虫損）気をふくめたる処也。是を句中の寂味といふ。

笑味

景清も花見の痩には七兵衛　」（02オ）

談笑体は俳諧のかたち也。悪七兵衛景清と名乗る剛兵も、花見の座には和きて、景清のかたみをくすし、大盃をも取かはして、七兵衛〳〵と呼らんと□（虫損）。俳諧の発明にて、おかしき心は句中にふくめり。是を、句中の笑味といふ。

悲味

塚もうこけ我泣声は秋の風

悲しきは風雅の実也。師弟の因も浅からぬに、其門人の早世をかなしめる。聞て末座も袖をぬらすへきは是也。是を句中の悲味といふ。

閑味

古池や蛙とひこむ水の音　」（02ウ）

此句は閑居の題なから、閑とも寂ともいはすして、句中に自然と閑情あり。是を句中の閑味といふ。くはしくは古池の解にて考ふへし（虫損）。

哀味

けふよりは書付けさん笠の露

此句は曽良と行脚の時、曽良は道より腹をいたみて伊勢の国へ別行し、其時の述懐也。誠や、旅中の友を失ひ、親弟の病苦をおもひ、我ひとり残れるさま、言語には出さねとも、其哀れさいふはかりなし。是を句中の哀味といふ。

凄味

義朝の心に似たり秋の風　」（03オ）

凄味とは心細きさまなるへし。そゝろ秋の風に吹なされて行衛定めぬ旅にうかれ出るは、彼義朝の内海に下られし時の心細さもかくやと、跡先を見る山野の物凄きさまを句中にふくめり。是を句中の凄

味といふ。

寒味

塩鯛の歯くきも寒し魚の棚

此句はもの字に心を付て、十月頃の魚店の干上りて塩鯛の歯くきのみ白く見ゆる、其余の寒風はおもひやられたり。是を句中の」（03ウ）寒味といふ。

暑味

六月や岑に雲をく嵐山

此句、盛暑の題なから、炎とも暑とも言語にはあらはさす、六月也、といふ五文字より、名にあふ嵐山も岑に一片の雲を置とは、炎天の情、言外にふかし。是を句中の暑味といふ。

長閑味

鶯や餅に糞する縁の先

此句なと、他門の人は何もなき事にいひなせとも、すへて正風の味ひは」（04オ）此処也。春もやゝあたゝかに成て、正月餅の薄かびにも成行を、縁に干渡して、そこら戸障子も明ひらけ、日影ゆふ〳〵とさし入るに、折〳〵鶯の樹木に通ひて、ある時は縁の上の餅にも来て、鳴つゝ糞なとし(虫損)ちらしたるは、さすかにくからす、春情を得たる処、尤句中の長閑さを聞取へし。是を句中の長閑味といふ。

面白味

いささらは雪見にころふ所まて

いさ雪見にころふ所まて行んとは、杖木履に老足をも□□(虫損)てくかれ行さま、心のおもしろき事いはんかたなく言外に深し。是を句中の」（04ウ）面白味といふ。

悪味

初雪をこぼして枝の烏かな

此句は作者しらす。常にはあるましき事なれとも、物をにくむも、又諷諫の一体也。こほしてといひ捨なから、悪ひといふは句中にあり。是を句中の悪味といふ。

涼味

さゝ波や風のかほりの相拍子

薫風に運て、さゝ波の岸うつさま、尤涼しき事、句中にあり。

憐味

乞食の事いふて寐る夜の雪

此句は李由か句也。句中に憐愍の情ふかし。是を句中の憐味といふ。」（05オ）

剛味

猪もともに吹るゝ野分かな

此句は野分の情をよくいひ立たる句也。猛獣の猪も吹まくらるゝとは、野分のつよき事、言外にあり。つよしとも、おそろしともいはて、自然と剛強の意あらはるゝ句法也。是を句中の剛味といふ。

暖味

雁さはく鳥羽の田面の寒の雨

寒中の雨には、きはめて暖気あり。雁も春情を得たるかと、帰らんとおもふ心さしあるにやといふ事を、さはくの一字にはたしきたる

也。」（05ウ）是を句中の暖味といふ。

右は、我家の秘訓也。此外、百五十味の細註あれとも、先此十五味を細看せは、始めて発句の意味をしるへし。他門に対して論すへからす。

宝暦十辰十月十二日　　茂竹堂

嵐白風人　　」（裏表紙見返し）

（白紙）　　」（裏表紙）

四、『極秘俳諧初重伝』一（欠本）

〈解題〉

著者不明の伝書。「俳諧」の字義について説いたもの。題簽には、「極秘俳諧初重伝　一」とあるので、二巻、あるいは三巻があったか。さらに、巻末近くに「此義ハ別ニ二重相伝ノ部ニ入テアル」という文言が見えるので、「初重伝」に続く、「二重伝」があったことが判る。あるいは「三重伝」などもあったかと想像されるが、目下、詳細は不明である。

〈書誌〉

書型……大本。写本一欠冊。楮紙。

表紙……砥粉色無地。縦二五．六cm×横一八．三cm。

外題……左肩無辺の題簽に「極秘俳諧初重伝　一」と墨書。

本文……毎半葉八行。

字高……二一．〇cm（本文巻頭「俳諧ノ名目……又此」を計測）。

丁数……三一丁（墨付き三一丁）。最終丁は裏表紙見返しに貼り込み

その他…四丁表「ヤハシイ」のカコミは原本ママ。

〈翻刻〉

極秘俳諧初重伝　一　　」（表紙・題簽）

（白紙）　　」（表紙見返し）

俳諧初重伝講義巻之一

俳諧名目伝

俳諧ノ名目伝ト云ハ、此ノ道ノ名ヲ俳諧ト云子細ト、又此俳諧ト云二字ハ漢字トテ、是ハ唐ノ文字ナルニ、是ヲ日本ノ風雅ノ道ノ名ニ用ヒ来ル訳ト、又此文字ノ義理ト、又此文字ニ言扁ト人扁ト書来ル事トヲ、委細ニ註釈スルニ付テ、先最初ニ和語（ヤマトコトハ）ト漢語（カラサエツイ）トノ差別ヲ能云」（01オ）、合点ノ上テナケレハ、先ニテスメヌ事アルユヘ、先此処ニ於テ、和語（ヤマトコトハ）ト漢語トノ訳ヲ云リ。和語ト云ハ、神世カラ今ニ云伝ヘテアル日本ノ詞ノ事。又漢語ト云ハ、人皇十六代応神天皇ノ御宇ニ、始メテ唐ノ文字カ渡リ、是カ日本下地ニアル文字ヨリモ、字数モ多ク、甚書ヨイ字ユヘ、今カラ是ヲ日本ニ通用サセヨト勅諚ニ任セテ、百済国カラ王仁ト云儒者ヲ召レテ、諸人ニ唐文字ヲ覚エサセ、唐文字ヲ覚ユルニ従テ、四書五経ナトノ様ナル唐ノ書モ読メル様ニ」（01ウ）成シユヘ、夫カラシテ日本ニ儒者ト云唐学問モ広マリ、唐学問カ広マルニ従テ、唐語（コトハ）ヲモ覚エテ通用スル様ニ成シ、此唐語（コトハ）ヲ、昔ハ漢語（カラサエツリ）ト云タソ。偖又今通用スル所ノ文字ハ、不残唐ノ文字ナレトモ、此文字、一字々々ニ、声（コエ）ト訓（ヨミ）ト二通ニアル。アノ声ト云ハ不残唐ノ詞テ、訓ト云ハ不残日本ノ詞ソ。タトヘハ、天（ソラ）ニ輝（カヤク）クモノヲ、日（ニチ）トモ云、日（ヒ）トモ云。此日（ニチ）ト云ハ、字ノ声ユヘ唐語

ニテ、日ト云ハ訓ユヱ、是ハ日本ノ詞、是ヲ和語ト云。又、木ノ字ノ中ヘ一ヲシタルヲ、本ト云訓ハ和語テ、是ヲ本ト云ハ字声ユヘ、是ハ」（02オ）唐語ソ。夫ユヘ、日本ト云ハ唐詞テ、日本ト云ハ和語ソ。又、神国ト云ハ、二字ナカラ文字ノ声ユヘ、是ハ唐語。神国ト云者、二字トモニ文字ノ訓ユヘ、是ハ和語ソ。正月ト云ハ唐語、正月ト云ハ大和語。二月ト云ハ唐語、キサラキト云ハ和語。一日ト云ハ漢語、一日ト云ハ和語。日月ト云ハ漢語、月日ト云ハ和詞。風雨ト云ハ漢語、雨風ト云ハ和語。雪月花ト云ハ漢語、月雪花ト云ハ和語。一筆啓上候ト云ハ漢語、一筆啓上候ト云ハ和語。暑寒ト云ハ漢語、暑サ寒サト云ハ和語。御」（02ウ）飯ト云ハ和語、御飯ト云ハ漢語。ヤハシイト云ハ和語、空腹ト云ハ唐語。瘧ヲフルフト云ハ和語、瘧ト云ハ漢語。父母ト云ハ和語、父母ト云ハ漢語。トモタチト云ハ和語、朋友ト云ハ漢語。厠ト云ハ和語、雪隠ト云ハ漢。ユバリト云ハ和語、小便ノ小水ノ小用ノト云ハ漢語。御実性カト云ハ和詞、御機嫌ノ御堅固ノ御実性ノト云ハ唐語。偖、是ヲ一々申セハ数万言ノ事テ、中々二日ヤ三日ニ申尽サレヌ事ユヘ、先大略右申ス趣ヲ以テ、和語ト漢語トノ差別ヲ能々合点スルコトソ。何テモ文」（03オ）字ノ音テ云ハ不残漢語、訓テ云ハ不残和語ト合点スルコトソ。神世カラ人皇十六代ノ頃マテハ、此国ノ語ニ交リ物ナク、唯和語ハカリニテ有シ。二十六代以後ハ、漢語カ交リテ、今ハ両方共ニ通用シテ、弥語ノ道カ広ク自由ニハ成テアレトモ、爰ニ一ツ歎カハシイコトハ、今ノ世ノ人ハ、唐学問ハカリヲ取用ヒ貴ンテ、和学ト云、我生国ノ学問ニハ疎クナリ、アマツサヱ漢語ヲハ上品ナ様ニ心得、和語ハ賤シイ語ノ様ニ思ヒ、一言云コトモ儒者ヤ医者ヤ仏者ナトノマネヲシタガリ」（03ウ）、ヤハシイオトト云。此国ノ古言ヲハ賤シイ語ト心得テ、イツホトヨリカ取失ヒ、今ハ唐語ヲマネテ空腹ノ虚腹ノト云。ヶ様ナコトカラ、次第ニ本ヲ忘レテ、枝葉ノコトハカリヲ取用ヒ、此国ヲハ神ノ国ト云カ和語ノ古言ナルニ、今ハ神国ナト、漢語ヲ使ヒ、此国ノ道モ神道ト云カ和語ノ古言ナルニ、今ハ神道ナト、唐メカシ、日本ト云カ和語古言ナルニ、是モ今ハ日本ナト、唐メカシ、大御神ト云カ和語ノ古言ナルニ、御明神ナト、唐メカシ、クスシト云ヘキヲ医者ト唐」（04オ）メカシ、ヤマト哥ト云ヘキヲ和歌ナト、唐メカシ、カラ哥トコソ云ヘキヲ詩作ナト、唐メカシ、ツレ哥ト云ヘキヲ連哥ナト、唐メカシ、ヒナ哥トコソ云ヘキヲ誹諧ナト、唐メカシテ云様ニ成下リタルハ、末世ニナルホト人ノ心ガ花麗ニナリ仇ニナリテ、我性国ノ日本ノ古言ヲハ忌嫌ヒ、唯一言云コトモ異国人ノマネヲスル事ヲ好ム様ニ成ユクユヱ、今ノ世ニナリテハ、ヒナ哥ト云本名目ヲハ取失ヒ、知モ知ヌモ誹諧々々ト漢語ニ云ナス事ハ、丁度ヤマト哥ト云ヘキヲ和哥ト漢」（04ウ）語ニ云ナレツレ、哥ト云ヘキヲ連哥ト漢語ニ云ナレタルト同シ事。是等ハ旧染メ穢ト云テ、五百年モ七百年モ染込タ事ユヘ、今更是ヲ改ムル事ハナラヌ事ナ□□（虫根）、道ヲ学フ者ハ、昔ハヶ様、今ハヶ様ト、古今ノ移リカハリモ合点シテ居ネハナラヌ事、誹諧ニ遊フ者ハ、先此名目カラアサヤカニスメテ行ネハ、誹諧ヲシナカラ誹諧ノ誹ノ字モスメヌト云テハ、誠ノ誹諧宗匠ト云物ニテナキユヘ、初重相伝第一番ニ、先此事ヲ伝授スル事ソ。前」（05オ）モ段々申述ル通リ、此誹諧ト云ハ、二字ナカラ文字ノ声ナレハ、是ハ例ノ漢語テコソアレ、此国ノ和語テハナヒソ。和語ノ名目ハ、是ヲヒナ哥ト云。ヒナ哥ト云ハ、イナカ哥ト云コトテ、イナカ哥トハ、田舎人ノヨムヘキ哥ト云コトソ。中古、人麿、赤人、万葉集ノ頃マテハ体品ノ差別ナク、連哥ノ誹諧ノト云名目イマタワカラス。何モ角モ、唯一ツニヤマト哥ト云デスンデ有タソ。夫ユヘ、万葉集ノ哥ニ、心詞ノヤサシク、ウルハシク、ウツクシキ哥モアリ。又、心詞モ俗ニ、賤シ」（05ウ）キ事ヲヨマレタル哥モ大分アル。其俗賤哥トモヲ、一二首挙テ云、

石丸ニ我物申ス夏痩ニヨシト云モノソウナギ取メセ

此哥ハ、中納言家持ノ哥ソ。石丸ト云人カ、夏ツケヲシテ、殊ノ外痩タ人テ有タ所、夏痩ニハ鱣カ薬ジヤホトニ、取セテ召上ラレヨカシト詠シタ哥ソ。是ヲ今ノ誹諧ニテイハ、

夏痩やツケニシテ来ル鱣売　」（06オ）

又、万葉ニ、

秋茄子ワサ、ノ粕ニ漬交テ嫁ニハクレシ棚ニ置トモ

是ヲ又、今ノ句ニイハ、、

嫁ヨリモ聟ニ喰スナ秋茄子

此外、此体ノ哥、万葉ニイカホトモアルソ。昔ハ、連哥誹諧ノ名目差別ナク、唯一ツニ大和哥テスンデ有タユヘ、カフアル。然所、四十二代文武天皇朱雀十二年ノ万葉時代ヨリ二百年余過テ、六十代醍醐天皇延喜五年」（06ウ）ニ勅ヲ受、紀貫之先生古今集ヲ撰ミ玉フ時、始テ大和哥ノ本躰ヲ定メラレ、是ハ（ママ）天子公卿以下、都ニテヨミ玉フ哥ト定メ、即八雲ノ御詠ヲ以テ和哥本躰（出拙）ノ濫腸（ママ）トナシテ、此外ニヒナ哥ノ一体ヲ定メ、是ハ神代ノ巻ニアル下照姫ノヨミ玉フ夷曲（ヒナフリウタ）哥ヲ以濫腸（ママ）トシテ、此体ヲハ、地下、田舎人ノヨムヘキ哥ノ体トシテ、古今ニ手本ヲ六十首出サレ、此体ノ名ヲ、ヒナ哥ト名ツケラレタソ。此ヒナ哥ト云名目ハ、即、神代巻ニ夷曲（ヒナフリウタ）哥ト云カアル、是」（07オ）ヲ本トシテ、ヒナ哥ト云ソ。此ヒナ哥ト云和語和名ニ、鄙（イナカ）ト云鄙（ヒナ）ノ字、又日本記ニアル夷（エビス）ト云字ナトヲ書セラレテモヨケレトモ、夷曲、鄙曲ナト、云文字ニテハ、アマリアカラサマナルユヘ、ヒナフリト云ニ誹諧（ハイカイ）ト云漢字ヲ以当ラレタ物、此二字ヲ填ラレタハ、撰者貫之公、深キ心有テ此文字ヲ書セラレタ。其事ハ、追々此先ニテ委細ニ申スソ。先、爰テハ、ヒナフリ哥ト云和語ニ、誹諧ノ漢語ノ文字当ラレタト合点スルコトソ。此類ノ文字遣ヲ、義」（07ウ）訓ノ文字ナト云人アレトモ、是ハスヘテ漢字（カナ）ト云物ソ。誹（ハイ）ノ字ヒナト云訓モナク、諧ノ字フリト云訓モナケレト、ヒナフリト云ニ当付テ読セタ物ソ。譬ハ、日（ニチ）ノ字ニヤマト云訓モナク、本（ホン）ノ字ニトト云訓モナケレトモ、ヤマトト云和語ニ日本ト云二字ヲ当付テ、是ヲ日本ト読セルト同シ事ソ。偖、神代ノ巻ニハヒナフリ哥トアルヲ、古今ノ時分ニハ、フリノ語ヲ略シテ、ヒナ哥ト云。其ヒナ哥ト云和名ニ、誹諧ノ二字ヲ当テ、ヒナ哥ト読セタ物ソ。」（08オ）丁度、ヤマト、云和語ニ大和（タイワ）ノ二字ヲ当付テヤマト、読セ、タナバタト云和語ニ七夕ノ二字ヲ当付テタナハタト読セタルト同シコトソ。然ハ、誹諧ト云二字ハヒナ哥トコソヨムヘキ事ナルニ、例ノ漢語ヲ好ミ、唐メイタコトヲ云チラスヲ上品ナ事ト心得テ、唯文字ノ唐声ヲ取テ、イツノ頃ヨリカ誹諧（ハイカイ）々々ト云誤ルユヘ、是ヲモテアソバヌ者マテモ、アレハ誹諧ト云物ソフナト（ママ）心得テ、知モ知ヌモ訳ナシニ、ハイカイ々々ト唐メカシテ云フラ」（08ウ）スユヘ、終ニハヒナ哥ト云哥道ノ本名ヲハ取失ヒ、今ノ世ハ日本国中一統ニ誹諧々々云物ト心得スマシテ、ヒナ哥ト云此国ノ本名ヲ知タ者ハ、ヒトリモナイ様ニ成タ。是又、旧染ノ穢シミ込テ、今更洗濯ノ仕ヤウナイソ。偖、古今集テハ誹諧哥ト書テ、ヒナブリ哥トヨム伝ソ。此ヒナフリ哥ト云名目ハ、日本記ニ出テアル。夫ヲ中略シテ、ヒナ哥トモ云リ。誹諧（ハイ）ノ二字ハ、即古今以後、ヒナ哥トヨムトノ伝ソ。サレバ、ヒナブリ哥ト云ヲ、ヒ」（09オ）ナ哥トモ云ノ證文ハ、昔、定家卿ヨリノ相伝道統、頓阿法師ヨリノ伝来、尭孝法師ノ第子（ママ）ニ、東下野守常縁ト云人、二条家ノ古今相伝ノ人ニテ、此人ノ第子ニ宗祇法師ト云人、東野州ヨリ古今伝授両度ノ聞書ニ、誹諧ト云ハ夷哥（エビス）ナルヘシ、日本記ニ所謂夷曲（ヒナブリ）也、即ヒナ哥ト云心也、トアリ。是、證文也。芭蕉翁モ、此旨ヲ能考ヘラレ、今ヨリ誹諧ト云唱ヲヤメサセテ、何卒ヒナ哥ト古言ノ通ニ称サセタイ物ト思ハレタレトモ、旧染ノ穢シミ」（09ウ）込テ、中々改ラタメラレヌユヘ、是非ニ不及トテ、ヤハリ誤ノマ、ニ誹諧ト称

ヘサセテ置レタルソ。今更改メラレヌ事ソ。譬ハ、此国ノ道ノ名ヲ神道々々ト云、漢語テ、是ハ至テ悪ヒ名目ユヘ、何卒古言ノ通ニ、神道ト称ヘサセタイ物ナレトモ、是亦旧染ノ汚シミ込ンテ、今更ヤメサセラレヌト同シ心ソ。此様ナコト、大分アルソ。大勢ニ無勢、力ニ及ハヌコトソ。

偖、是カラ誹諧ノ字義ノコトヲ云ソ。此二字ハ、一字ツヽハ」（10オ）唐ノ字ナレトモ、是ヲ二字続ケテ書タ例ハ、儒書ニモナヒ。是ハ、延喜ノ御世ニ、貫之公カ始テ二字ツヽケテ書出サレタリ。上ノハ、言扁ニ非ノ字。是ハ、誹謗ノ誹ノ字テ、和語ニハソシルトヨム字ソ。下ノハ、言扁ニ皆ト云字。是ハ、和也、合也ト註シテ、和語ニハ、ヤハラクトモ、カナウトモ、合フトモヨム字テ、五倫ノ間、打和ラキ、ヨク和合シテ、面白ク、ヲカシク、ムツマシク、親シフ附合ヲスル心ノ字ソ。然レハ、誹ノ字ト諧ノ字ト、二字ヲ熟シ合セテ誹諧ト云時ハ、ソシリヤハラグ」（10ウ）ト云義理ニナル。偖、此ソシルト云詞ニ、段々子細ノアルコトテ、中々ツイ合点ノ行コトテハナヒ。先、世間俗人ノ心得ニハ、ソシルト申スル事ハ、人ノ悪事ヲ訐キ出シテ、陰テ散々ニ云崩シ、悪言ヲスル事トノミ、一□ニ心得テ居ル。夫ユヘ、ソシルト云ハ、至極悪言ノ様ニ一統ニ合点シテ居ル。全ソフ云コトテハナヒケレトモ、是ハ俗習ト云テ、俗ニハ義理違ノコト大分アル。依之、誹諧ヲ学フ人々ノ心ニ、誹諧ノ誹ノ字ニ誹ト云読ノアルハ、何共イヤナコト、物ヲ誹ルト云ハ人ヲ悪」（11オ）言スルコトユヘ、ロクナ事テハナヒニ、夫ヲ大切ナ風雅ノ名ニ用ユルト云ハ、当ラヌコト。今日詠トコロノ発句附句トテモ、人ノ教誡ニナリ、人ノ為ニナル物テコソアレ、人ヲ誹リ、悪言スル様ナコトハ少モナヒ。然レハ、此誹ト云字ヲ書ハヨナイ。殊ニ、言扁ニ非ノ字。此非ノ字ハ、非トモヨム字ナレハ、言ノ字ト非ノ字ヲ分テ云時ハ、非言ト云字ニナル。非言ハ、即ワルコトハ、ワルイナト、ヨメル字テ、至テ悪ヒ字シヤホトニ、今カラ言扁ヲヤメテ、人扁ノ俳ノ字ヲ書カヨイ、ナト、」（11ウ）云人アレトモ、人扁ニ非ノ字ハ、タヲレルト云読ノアル字テ、是モヨナイ字ソ。又、人扁ト非ノ字ヲワケテ見時ハ、非人ト云云ニナル。人ニ非スト云ナラハ、是モロクナ字テハナイ。俗ニ非人トイヘハ、乞食物貰ノ事トノミ心得タレトモ、唐テモ物真似豆蔵ノ類、哥舞妓人形芝居ヲスル者ナトハ、スヘテ倫界ヲ削ルト有テ、君臣父子夫婦兄等朋友ノ五倫ヲハブカレタ者トモユヘ、人倫ニ非スト云心テ、是等ヲスベテ非人ト云。日本テモ其通リ、能役者芝居者ノ類ハ、河原者」（12オ）ト云テ、人倫ヲハブカレタ者テ、此類スヘテ非人ト云者ユヘ、三ヶノ津テモ、是等ハ人外者ト立テ、人ノ交ハリ附合モナク、勿論縁合ナトハ一向セヌ事テアル。此類、皆非人タル故ノコトソ。然レハ、ハイカイノハイノ字トテモ、人扁ヲ書ケハ非人ト云字ニナル故、人扁ヲ書ハ甚ヨナイ。マダ是ニ段々子細アレトモ、此義ハ又アトテ委シフ云リ。先、爰テハ言扁ノ誹ルト云義理ノコトヲ、委シフ云リ。世間通俗ノ心得ニ、誹ルト云ハ人ヲ悪言スルコトトハカリ合点シテ居レトモ、全本義ハ左様ナコトテハ」（12ウ）ナヒ。人ノ陰言ヲ云タリ、人ヲ讒言シタリ、人ノ為ニ害トナル悪言ヲスルコトテハナヒ。唐テモ、昔聖人ノ世ニ、朝廷ニ誹謗ノ木ト云ヲ置レテ、上カラ出ル御政事ノ、悪ヒト思フ事ハ用捨ナシニ此木ニ書付ヨト云板カ出シテアル。是ヲ誹謗ノ木ト云トアル。誹謗スルト云ハ、人ハ悪事ヲ誡シメテ、其人ヲ善人ニ導ヒキ仕立ル事ユヘ、至極人ノ為ニナル善言テアル。夫故、唐テモ聖人カ道ヲ立テ、人ノ悪ヲ誡シメテ善人ニナル様ニ教誡スルヲ誹謗ト云アリ。四書五経ナトニアルコトハ、皆人々ノ」（13オ）悪ヲ誡シメテ、善ニス、ム事ヲ教ヘタ書ナレハ、論語孟子ノ類ハ、皆誹謗ノ書ト云物テアルソ。即、四書五経ヲ出シテ見玉ヘ。コト、、ク人ノ悪事ヲ書テ、ヶ様ナコトハ決テスル事テハナヒト、人ヲ誡シ

メテ善ニス、ム事ヲ教ヘタ物テアル。譬ハ、論語ニ孔子謂季氏八佾舞於庭是可忍也孰不可忍也トアル。是ハ、孔子カ季氏ト云者ノ事ヲ誹テ□（虫損）ラレタ詞。季氏ハ魯ノ大夫トアル。諸候ノ家老ナトノ様ナ物ト見エル。八佾ニシテ庭ニ舞スト云ハ、アル時我処テ舞楽ヲサ」（13ウ）セタコトカアルト見エル。其時、八佾ノ舞ヲサセタト見エル。然ニ八佾ト云ハ、八八六十四人ヲ舞スルコトテ、是ハ天子ノ舞楽ニ限タコトテアル。其下ノ諸候ハ、六六三十六人也。其下ノ大夫ハ、四四十六人ヲ以舞スルコトトキコユルニ、己カ大夫ノ身ナカラ、天子同様ニ八佾ヲ舞スルト云ハ、狼籍（ママ）至極ナ事ト、季氏ヲ散々ニ誹リ、必此様ナ法外ナコトハスル事テハナヒ、兎角人ハ己カ分相応ナ事ヲシテ、少モ奢タコト、出過タ事ヲハスル物テナヒト、教ヘラレタコトテアル。是、孔子ホトナ聖人ナレトモ、季」（14オ）氏ヲ誹ラレタハ、即諸人ヲ善道ニ導ノ教誡ノ旨テアル。此類ノ事、四書五経ニ大分アル。又、今日テモ、主人ニ向ヒ主人ノ悪ヲキヒシク諫言シテヤメサスルハ、主人ヲシカリ奉ル義。是カ即主人ヲ誹ルト云者、誹テ其悪ヲヤメサセテ善人ニスルハ教ノ場テアル。又、朋友ニ悪事ヲナス者カアレハ、夫ヲ見ヌ顔シラヌ顔ヲスルハ不実ナコトユヘ、トウソ其悪ヲヤメサセテ善人ニセネハナラヌ。然共、直談ニ異見ヲスレハ却而迷惑スルコトモアルユヘ、是ハ直ニ不レ言、其者ノ別シテ心易イ者ナトヘ」（14ウ）、咄ノ様ニ、誰々ハ聞ケハヶ様ナ事ヲセラレタケナガ、偖々、是ハ悪ヒ事、ト其人ヲ誹リ、此義何トソ以来ヤメラル、様ニ、貴公ヨリ異見シ玉ヘカシト、気ヲ付テヤル。是、一旦其人ヲ非言スル様ナレトモ、其悪ヲヤメサセテ善人ニスルトキハ、全始ノカ悪言テハナヒ、善言ト云物ニナルソ。我カケカマイモナイ人ナラハ、誹ルニモ笑フニモ及ハズ。知ヌフリシテ、タマツテ居ルテスム事ナレト、兄弟朋友君臣父子ナトノ悪ハ、見テハ居ラレヌコト故、是非トモ異見ヲ加ヘテヤメサセネハナラヌソ。俗ニハ、是ヲ異見スル」（15オ）トイヱリ。サレトモ、是ヲ異見ト云ハ、後世ノ間違詞テ、一向当ラヌコト。是ハ、諫言ト云物テコソアレ。此人ヲ諫言スルト云カ、即誹謗スルト同シコト。諫言ト云時ハ、其人ノ悪事ヲ言テ嘖（シカ）ルコトテアル。人ヲ諫メテ嘖ルハ、即其人ヲ誹ルコトテアル。誹ルト云ハ、其人ヲ誡メルコト。丁度、病気ニ針ヲ立テヤル様ナコトテ、諫言ヲ云ウチニ、是ハ何共其元ニ不似合ナコトヲナサレタ、以来ヶ様ナコトハ急度ナサレヌカヨイナト、、キビシウ云所カ、其人ヲ誹ルト云物テ、是カ丁度、病気ヲトラヘテ針ヲ立ル」（15ウ）ト同シ心持ソ。既、古文集ニ人ノ悪事ヲイマシメタ文ニ、大賚箴（シン）、四ノ箴ト云アル。此箴ノ字ハ、イマシメトヨム字テ、此箴ノ字ハ、病ニ刺ス鍼（ハリ）ノコト。昔ハ、箴石ト云テ、石ヲ針ニ摺テ病ニ刺ス。今ハ、以レ鐵刺スソ。故ニ、人ノ悪ヲモ諷刺（シ）スル所有テ、其失ヲ救フヲモ、即箴ト云トアル。然レハ、五倫ノ悪ヲヤメサセントテ其人ヲ誹ルハ、丁度箴石ヲ以其人ノ病ニ刺ト同シコトユヘ、ソシルト云。誹ノ字ハ、此箴ノ字ト同意ニナル。又、諫言ノ諫トモ同シコト。又、俗ニ異見教訓スルト云モ同シ。然ニ、誹ル」（16オ）ト云ハ、唯人ヲ悪言スルコトトハカリ心得タハ、是ハ俗解ト云テ、甚誤ノコト。決シテソフ云コトテハナヒ。此誹ルト云詞ハ、人ノ悪ヲ誡メテ善ヲス、ムルノ詞テ、丁度病ニ針ヲ刺テ其悪病ヲ直ス、ハリト云箴ノ字ト同シ心テアルソ。併、誹ルハ針ヲサスノサスト同シ心ジヤトハカリ申テモ、マダトクト御合点ノアルマイ程ニ、此誹ルト云和語ノ訓伝ハ秘説ナレトモ、ツイテニ相伝致ス。是テズント能合点ノユクコトユヘ、猶又委細ニ云。人ノ悪心ニ針刺テ善心ニスルコトヲ、誹ルトハドウシテ云ソ。ナレハ、惣而日本ノ詞ニハ、本語」（16ウ）末語ト云コト有テ、詞ニコト〳〵ク本末アル。詞カ詞ヲ生ミ出シ〳〵ニシテ、唯物詞カ広ク成タ物故、下カラ押ノホセテ上ルトキハ、本語ニハ本語カアリ、本語ニハ本語カアリテ、ツ、マル所

ハ四十四音ノ直音ト云ニナル。此四十四音カ変化自在シテ、千言万言モ出来タユヘ、和学ニハ本語伝ト云コト有テ、和語カ一ツ〳〵スマネハ、日本ノ学問ハスメルコトテナヒト云テアル。是ハ大キナコトテ、誹学ナトニハ強テ入用ノナヒコトナレトモ、誹ルト云詞ヲスメル日ニナリテハ、此本語伝ト云所ヘ至ラスシテハ、スメヌコトテアル。先、此誹ルト云詞ハ、後語ト云テ、後ニ」（17オ）出来タ詞テ、此詞ノ本語ハ、ソスト云詞テアル。此ソスト云詞ノ、スノ一音ヲ伸ルト、ソシルト云ニナル。ソコテ、此ソシルノシルト云ヲ、ツ、メルト、ソスト云ニナル。先、古言ニ誹ルト云コトヲ、ソスト遣フテアル例ハ、源氏物語葵巻ニ、我タケクイヒソストアル。是、イヒソシルコトヲ、本語ヲ以言誹（イヒソス）ト書レタ物ソ。タケクイヒソストハ、強ク言誹（イヒソシル）ト云コトテ、キビシク諫言ナトシタルサマヲ云。偖、此ソスハ、サスト同音ノ詞ユヘ、サスハ即病ニ針ヲサスノサスト同シ心ユヘ、誹ノ字ハ箴ノ字ト同シ心ト云。是ハ日本反（ヤマトカヘシ）ト云テ、五十音仮」（17ウ）名反ノ事カ合点ナケレハ、ツイハ合点ノユカヌコトナレトモ、一通申サネハ伝授ノ筋カ立ヌユヘ委細ニ申スソ。合点ノ行ヌ所ハ、追々工夫シ御覧アルカヨイ。中々容易に合点ノ行コトテハナヒ。又、ソストサストハ、同シ心ナレトモ、詞ヲ二ツニシテツカフタ物。此例、和語ニ大分アル。一ツ譬ヘテ云ハ、、魚ニウロコト云物アル。是ヲ、イロコトモ云。イトウトハ同音ユヘソ。又、魚ノコトヲ、ウロクツトモ、イロクツトモ云ハ、クツノ反シクニテ、ウロクト云ニナル。是ハ、下ノクノ音カ五音ニ同音ナルユヘ、ウロコノコトヲ、ウロクトモ云タモノソ。又、瓦屋根ヲ甍（イラカ）ト」（18オ）云。此イラカト云モ、魚ノウロコト同シ詞テ、瓦ブキハ魚ウロコヲ見テ思イ付而コシラヱタ物ユヘ、直（ジキ）ニ其名ヲウロコブキト云義。ウロコトバカリ云時、魚ニマギレヌタメニ、是ヲハ詞ヲカヘテ、イラカト云。是即、本ウロコモイラカモ、詞ハカハレト同シ心ト云所カ、丁度、ソスサスト詞ハカハレトモ同シ心ト云ト同然也。心ハ一ツナレトモ、詞ヲ少ツ、取カヘテ、其物々々ノ用ヲナシタ物。是ヲ、ソストサスト詞ハカハレト義理ハ同シコトト云所、能々合点アルヘシ。但、一ツヲ色々ニワケテツカフタメニ、詞ヲ少ツ、取カヘタルト云モ、猥ニカ」（18ウ）カ（ママ）ヘタ物テハナイ。スヘテ天地自然ノ五音相通ヲ以シテアルコトユヘ、ソスモサスモ五音相通ト云所、能ク合点スルコトソ。偖、是是（ママ）テ大カタ言扁ノ誹字ノ心ハ合点ノユクコトユヘ、是カラ諧ノ字義ヲ（虫損）云。言扁ニ皆ト云字、是ハ唐テハ和也、合也、偶也ト註シテアル。日本テハ、ヤハラク、アハスル、カナフナト、ヨム字テアル。夫故、此字ノ心ハ、人ト交ハル時ノ詞ハ、第一、万物和ラカニウツクシウ云コト、合スルト云ハ人ノ言コトニ大ニ違フタコトヲ不レ言、ツカヌコトヲ不言、人ノ言コトニ取合ノヨキコトヲ云。タトヘハ、咄ヲ」（19オ）スルニモ、人ノ咄ニ取テモ附ヌ藪カラ棒木ニ竹ト云様ナコトヲ不レ言、丁度、脇、弟（ママ）三、四句目ト、段々ツラネテ行ニ、前句ニ附、前句ニ附テ行ヲ、附合ト云。此附合ノ合ノ字ハ、即アハセルト云テ、誹諧ノ諧ノ字ノ心カ是ト同シコト。人ノ交リヲモ附合（ツキ）ト云、句ヲ附テ行ヲ附合（ツケ）ト云。ドチラモ同シ文字テ、今日人ニ附合モ、句ノ附合モ、和也、合也、ト云。此諧ノ字ノ心テナケレハナラヌ事ユヘ、今日世法即誹諧、誹諧ハ即今日ノ世法ト心得、世ノ交リノ指合去嫌ヲ考ルコト、附合」（19ウ）ノ如ク人ニ交リヲムスフモ、アマリ親シ過ヌ様ニ、又疎遠ナラヌ様ニ、親疎ノ中道ヲ行様ニ心得、世事万端ヲ附合（ツケ）ノ如クニ附合ヲナス時ハ、誹諧ヲ以一心ヲモ治メ、身モ治メ、家モ治メ、事ニヨリテハ国ヲモ治メ、天下ヲモ治ムルニ、是テ治メラレヌト云コトハナヒソ。偖、又誹（ハイ）ノ字、諧ノ字ト二字ヲ取合テ、ヒナ哥ノ当字ニ用ヒタル心ハ、誹ノ字ハソシルトヨム字テ、誹ルト云ハ源氏ニタケクイヒソストアルカ如ク、人ノ悪事ヲキビシク諫言スルコトナレトモ、アマリ強クキヒシク異見」（20オ）ヲス

レハ、却テ人ノ心ヨク不思、腹ヲ立ルコトアル。爰ヲ、唐テモ忠言ハ逆耳ト云テアル。其人ノ為ニナルコトヲ云テ聞スルコトナレハ、是ハ〳〵御親切、山々有難カタシケナイト、厚ク礼ヲ云ヘキヲ、左ハナクテ、却テ腹ヲ立、フクレ面ヲシテ、中々聞入ヌ者カ多ヒ。是ハナゼナレハ、アマリ理屈カマシク、強タ（ママ）キビシク云ハ、直諫ト云テ、向ノ気ノ逆立モノナレハ、異見ヲスルニ強クキビシキ直諫ニナラヌ様ニ、諷諫ト云ヲ以異見スルカヨイ。諷諫ニハ、人カイカニモト感心感伏ヲスル物ユヘ」（20ウ）、孔子ノ家語ト云書ニ、人ニ異見ヲスルニハ、直諫ヨリモ諷諫カヨイト云テアル。諷諫ト云ハ、物ニヨソヘナソラヘ、詞ヲ和カニ、ウツクシフ、ヲカシウ、其人ト能和合スル様ニ物和ラカニ異見ヲ（虫損）スルコトテ、是ヲヒナ哥ノ本意トスルコトユヘ、誹ノ字ニハ其人ノ悪事ヲキヒシクソシル字ヲ出シ、其下ニハ諧ノ字ノ詞和ラカニ、ウツクシウ、ヲカシウ云道理ノ字ヲツヽケテ書、誹諧ハ人ニ異見教誡ノ為ニスル句モ、表ニ埋（マヽ）屈ヲキヒシクセメスシテ、詞ヲ和ラカニ、ウツクシウ、面白ク云ナスヘキコトヲ教ユル」（21オ）為ニ、誹諧ト二字ヲムスンデ、ヒナ哥ノ和語ヲ当ツケタモノソ。誹ノ字ハキヒシク悪ヲソシル字ナレ共、下ニ三ツトヒカヘ、綱ニ諧ノ字ノ和合スル字ヲ付テアルテ、彼悪ヲ誹ル非言モキヒシク不レ言、物和ラカニ云ヘト云心ソ。句モ亦此心ソ。趣向ヲアマリニキヒシクイヱハ、句カギスイユヘ、詞ヲ和ラカニ、幽玄ニ、面白ク、人ノ感伏スル様ニ句作スルコトソ。今日世ニ交ハル所之一言云コトモ、皆此心得ニ云コトソ。和哥連哥ノ点ヲスルニ、其哥ノ悪ヒ所ヲ指南シテ書ツケル詞ヲ非言ト云。非」（21ウ）言トハ、其哥其連哥ノ悪ヒ所ヲ、誹リ咎メテ云詞テ、非ハ非（アラス）ハト云字、言ハ言（コトハ）ト云字テ、即誹諧ノ誹ノ字ヲ二ツニワケレハ、非言ト云字ニナル。是ハ其哥其連哥ノ悪ヒ所ヲ誹テ云ヲ、哥ノ病ニ針ヲサスト同シ事ソ。此非言ヲ書ニモ、アマリ嘲哢シタ様ナ詞ヲハ不レ書、随分物和ラカニ、面白ヲカシウ書カ諧ノ字ノ心持テアル。偖、是マテニテ誹諧ト書テヒナ哥トヨムヘキ古名ノ伝ハスム。并、ヒナ哥ノ当字ニ誹諧ト書二字ノ伝説スム。是カラ誹諧字論ノコトヲ申」（22オ）。偖、前ニモ段々申シタ通、ヒナ哥ト云和名ニ誹諧ノ二字ヲ書始メラレタハ、延喜ノ御代ノ古今集カ始メテ、其後モ皆此言扁ノ字カ書テアルユヘ、勅撰ヲ鑑トシテ、イツマテモ是ヲ用ユルコトテアル程ニ、千年コノカタ、哥道ハ今以此字テアル。又、今ノ誹諧ニ成テモ、伊勢ノ守武、山崎宗鑑、西山宗因、松永貞徳、北村季吟、芭蕉翁マテ、スヘテ言扁ノ字テアル。既、芭蕉翁在世ノ撰集、七部ノ書ニモ、不残古今集ノ通ニ言扁ノ誹ノ字書テアル。殊ニ、芭蕉ノ正風体ト云ハ」（22ウ）、古代古今集ノヒナ哥ヲ本トシテ、正風ノ筋目ヲ発明セラレタコトユヘ、彌哥道ノ通ニ、ヤハリ言扁ノ誹ノ字ヲ背カヌ様ニ、大切ニ用ヒラレタユヘ、門人其角、嵐雪、去来、丈草ヲ始、不残師匠ノ通ニ言扁ノ誹ノ字ヲ大切ニ用ヒラレテアル。此訳ハ、勅撰ノ和哥集ト云ハ、天子ノ勅ヲ蒙テ、万世ノ鑑ニ撰ハレタ書テ、別シテ古今集ハ哥道第一ノ明鏡ニタツ大切至極ナ書ナレハ、是ニアルコトハ、万代不易ノ明鏡ユヘ、後世ノ人、一字一点、是ヲイラフコトナラヌ。末代ノ天子ヲ始奉リ、公卿方テモ、一字モイロハヤラル（虫損）〳〵コト」（23オ）ナラヌ。マシテ地下人ナトハ、勿論手サシヲスルコトナラス。事殊、芭蕉ハ古今集ノ誹諧哥ヲ本トセラレタ事ユヘ、古今ノ誹諧ノ字（虫損）ハ、猶々大切ニ守ラレタコトユヘ、是ヲ少モ改タメ直スナト、云様ナ法外ナ心ハ、少モナヒ事テ有タユヘ、生前ノ書スヘテ言扁ノ誹ノ字カ書テ有。然ニ、芭蕉僊化ノ後、三十年ヲ経タレハ、門人方モ大カタ死果タル所、美濃ノ支考ト云弟子、一人生残リテ居タ所、此坊主、心法ハ大売僧者ナレ共、芭蕉ノ直弟ト云ヒ、文章達者テ小学問モアリ、利口発明者テ有タト見」（23ウ）ユテ、東国諸国ヲ経回リ、天下ノ誹人ヲ大カタ我弟子ニ切ナヒケ、世ニ恐シイ者モナヒ様ニ大口ヲキヽ、哥道

ヲ誹(ソシ)リ、連哥ヲ笑イナトシテ、芭蕉ノ意気方トハ大ニ違ヒ、何モカモ大カタ我流ナレ共、何分芭蕉ノ直弟ナレハ、何コトモ翁ヨリ相伝ノ様ニ云フラシ、芭蕉ヲ本尊ニシテ売マハルユヘ、諸国大カタ門人ニ切ナヒケ、種々様々ノ偽書偽伝ヲ作リ、アクマテ謀計ヲナセトモ、誰有テ夫ヲ見出ス様ナ者モナク、辨舌口才ニ云マハサレテ、諸人閉口スル時節ヲ考ヘ、言扁ノ誹ノ字ヲ人扁ニ改メ」（24オ）ント云謀計ヲナシタレトモ、我自己ノ了簡ト云テハ人カ信仰セヌ故ニ、ヤハリ芭蕉ノ改タメラレタ様ニ云ナシ、古今抄ト云書ヲ作リテ、芭蕉序文ヲコシラヘ、史記、漢書ニアル俳諧ノ文字ヲ見付出シ、抑(ソモソモ)我家ノ俳諧ハ二千餘歳ノ昔ニ名有テ、周秦ノ頃ヨリ諷諫ニ知ラレ、漢魏ノ間ニ談笑ヲ弘ムレハ、史記ニハ孔門ノ四書ニナソラヘ、ナト、唐ノ俳諧ヲ取出シテ、日本勅撰ニアル言扁ノ字ハ、貫之公ノ誤リナト、勅撰ノ撰者ニ誤ヲツケ、今ヨリ我家ニハ人扁ヲ用ユヘシ」（24ウ）ト云芭蕉ノ文ヲ偽作シテ、天下ノ人ヲ誣ツケタレトモ、誰有テ一人モ是ヲ難スル者モナク、其頃支考ニ太刀ノ合フ誹人一人モナヒユヘ、皆誣ツケラレテシマウタレトモ、是ヲ蕉翁ノ本意テナイト云コトハ、写本ニ去来遺稿ト云テ、芭蕉ニ聞レタコトヲ書集メテ置レタ書カ一巻アル。是ヲ見ルニ、我家ニハ言扁ヲヤメテ人扁ヲカケナト云コト、一向ナヒ。唯、我誹諧ハ古今ノ誹諧哥ヲ本トスルト云コト、段々書テアルユヘ、言扁ヲ改メルナト云コト、一向芭蕉ノ本意テハナヒ。然レハ、彼支考カ古」（25オ）今抄ニアル芭蕉ノ序文ト云ハ、全偽作イツハリニ相違ナヒソ。偖又、古今ノ通リ、古代ノマヽニ言扁テモヨイ。支考ハ、何ユヘニ言扁ヲ嫌フテ人扁ニ改タメタソト云ニ、是ニ段々訳アル。先、言扁ノ字ハ、字書ニ敷尾切音斐(ヒ)ト有テ、是ハ誹(ヒ)音テコソアレ、全誹(ハイ)ノ音ハナイニ、夫ヲ書テハイカイトヨムハ無理千万ナコト。誹(ヒ)諧トヨムナラハ尤ナレトモ、是ヲ誹諧トヨムハ大キナ誤リ事。是ハ全古今集(虫損)貫之(虫損)ノ誤ト見ヱタコトユヘ、是ハ何テモ人扁ニ改メルカヨイ。殊ニ人扁ヲ書タ俳諧ト云字」（25ウ）ハ、史記ニモ漢書ニモ歴然ト書テアルコトユヘ、是ハ是ヲ用ユルカヨイト云テ、夫カラ人扁ニ書(虫損)改メテ、人扁ノ俳諧ニ色々道理ヲ付タコトユヘ、天下ノ人、皆是ヲ尤ト思ヒ、儒者、医者、出家ナトノ様ナ小力モアル様ナ者ハ、言扁ハ誹(ヒ)ノ音テ、ハイノ音ノナヒ事ハ兼テ知テ居ルコトユヘ、是ハ古今抄ニ改タ□(虫損)、尤ナコト。流石ニ芭蕉ホト有テ、貫之ノ誤ヲ直サレタハ有難イコト、ナト、小学問ノアル者カラ尤ジヤト用ユル故、其外力ノナイ誹人ハ、猶々是ハ尤ノコトト信仰ヲナシ、偽作ノ序」（26オ）文ト云コトヲ見出ス眼力モナク、古今集ニ貫之公ノ言扁ヲ書テ置セラレタ故実モ合点ユカス、言扁ハ誹(ヒ)ノ音テ誹(ハイ)ノ音ナク、人扁ハ正シク俳(ハイ)ノ音ナレハ、是尤ノコトト同心ヲナシ、今ハ美濃流ノ者ハカリテモナク、其角流ヤ嵐雪ノ流ヲ立テ、昔ハ言扁ヲ書タ人々モ、今ハ大カタ支考流ノ通ニ、皆人扁ヲヨイト心得用ユル様ニ成テアルハ、偖モ、歎カハシイコトナレトモ、手前ノ暗(虫損)ヒト支考ガ謀計トニクラマサレテ、今ノ世ハ大カタ人扁ヲ書様ニ成テアル。是、全芭蕉ノ」（26ウ）本意ニハ叶ハヌコトソ。偖、言扁ハ誹(ヒ)ノ音テ誹(ハイ)ノ音ナキユヘ言扁ヲ書ハ悪イ、是ハ人扁ノ俳(ハイ)ノ音ノアル字ヲ書カヨイト云ハ、当然ノ理ナレトモ、是等ヲ鼻ノ先学問ト云テ、何ノ役に立ヌコト。是テ見レハ、支考ナトハ文筆ノ達者、天晴才子ノ様ナレトモ、鼻ノ先学問テ有タト見ヱル。先、古今集テハ、ハイカイトハヨマス、ヒナ哥トヨム事ナレハ、字ノ音ハ、ヒノ音テアロト(ママ)、ハイノ音テアロト(ママ)、唐ノ音ニハカマハヌコト。唯、其字ノ義理カ、ヒナ哥ト云ニ叶サヘスレハ、カマイナイコト。其上、言扁ノ字ハ悪ヲ誹リ善」（27オ）ヲス、ムルノ義テ、ヒナ哥ト云義理ニヨク叶フユヘ是ヲ書レタ物テコソアレ、支考カ云様ニ音ニハカリカ、ハリテ人扁ニ書ト、悪ヲソシリ諷諫シテ善ニ導クト云義理ハ一向ナヒ。此、人扁ノ俳ノ字ノ義理ハ、人ニ非(アラス)ス、非人ト云字義テ、

此ノ字ヲ字書テ見レバ、俳ハ俳優也、俳優ハ雑戯（ザツキ）也、或ハ俳倡ナト、モアリテ、俳優雑戯ト云ハ、今ノ世ニアル能、狂言、哥舞、アヤツリ、獅子舞、傀儡師、物真似、軽口、豆蔵、チヨンガリノ類ハ、スヘテ俳優雑戯テ、此類ハ唐」（27ウ）テモ日本テモ河原者ト云テ、乞食非人ノ一類ユヘ、唐テモ倫界ヲ削ルト有テ、人間ノ部ヘハ入ラレヌ者故、是ヲ非人ト云テ、即文字モ人扁ニ非ト云字ヲ製シテ、河原乞食ノ一類テアルユヘニ、人扁ノ俳ノ字ハ、和訓ニタチモトヨルトヨム。タチモトヨルト云ハ、トンズクシケツシテ舞ヲナス人ノコト。神代巻ニ、面ニ丹ヲヌリ、手ヲ上、足ヲ上ルヲ俳優者ト云テアル。此類ハ、至テ卑賤ノ者ノコトヲ云。然ルニ、月花ヲメデ、和哥ノ道ノ風雅ニ遊フ者カ、豆蔵ヤチヨンガリノ中間デ有フ様カナヒニ、支考カメツ」（28オ）タニ人扁ヲ書タガルハ、ハイカイ師モ、豆蔵ノ類ナル心ト見ヱテ、是ハ鼻先学問ノ浅ハカ所カラ出タコトテ、全芭蕉翁ノ本意ニ預カルコトテハ少シモナヒ。其上ニ、誹（ヒ）ノ音ノ、俳（ハイ）ノ音ノト云ハ、音ノセンサクテ、是ハ唐ノ事テコソアレ、神学哥学ナトニハ音ノセンキ、穴勝入ヌコト。其上、唐テ文字ヲ作リ、其文字一ツ一ツニアチノ学者カ音ヲツケルニモ、メツホウヤハチニ付タ物テモナイ。スヘテ文字ニハ扁ト作リト云物カ有テ、字ト字トヲ合セテ文字ヲ作リ広メタ物テ、其字ノ音ト云ハ、扁ニ」（28ウ）ハカマハス、多ク作リヲ以テ音ヲ定メタ物テアル。即、今カク言扁ニ非ノ字ハ（虫損）、作リニ書□（虫損）非ト云字ハモト非（ヒ）ノ音ナレハ、言扁ヲツケテモヤハリ誹（ヒ）ノ音（虫損）ニアル。然ハ人扁ニ非スト云字、ヤハリ俳（ヒ）ノ音テ有ソナ物ジヤニ、人扁ヲ合セタトキハ、ハイノ音ニシテアルソ。非（アラス）ト云字ニ非（ハイ）ノ音ハナヒニ此俳（ハイ）ノ音ハトコカラ取出シタソト云ニ、是ヲ明ニ合点スルコトハチトムツカシヒコト。支考位ナ学シヤ共ノ知タコトテナヒ。必竟ツ、マル所カ、言扁ニ非ノ音モアリ、又内ニハイノ音モアル、又人扁ニハイノ音ガアレハ、是ニモ又内ニヒノ」（29オ）音モアル。言扁ヲ書テモ、ハイカイトヨマレヌコトハナイ。貫之公者、和漢ノ学者。此処能御合点ユヘ、人扁ヲ不用、言扁ヲ書テ是ヲハイカイトヨムナラハヨメ、クルシカラヌト云義ヲ以書テ置セラレタコトテコソアレ、中々支考ナトカ百人ヨツタレハトテ、貫之公ノ大才ニ及フコトテハナヒニ、己カ文蒙未熟ナルコトハ不弁、古今ニ言扁ヲ書レタハ貫之ノ誤ジヤナト、、身ノ程知ラヌ狼籍（ママ）至極ナコト□（虫損）云チラシテ置タ大売僧坊主メテアル。セメテ己カ（虫損）一存テ云タニシテ置ケハ、大切ノコトジヤ。芭蕉ノ似セ序ヲ」（29ウ）書テ、己カ咎ヲ師匠ニマテ恥ヲカ、セル様ナコトヲ致シタヤツテ、今天下ニ芭蕉ノ俳諧ヲ崩シタモノハ、其角、嵐雪ハカリテハナヒ。第一ハ此売僧カ過半崩シタコトテアル。偖又、言扁ニモヒノ音モハイノ音モ共ニ有コトナレトモ、言扁ハヒノ音ヲ表ニシテハイノ音ハ内ニ持セ、又人扁ハハイノ音ヲ表ニシテヒノ音ハ内ニ持セテアルト云コト、爰テ序ニ合点ノ行様ニ申シサトシタケレトモ、是ハ古今集ノ誹諧哥（ヒイカイウタ）ヲ取サバク大切ナコト故、此義ハ別ニ二重相伝ノ部ニ入テアル。今日ハ」（30オ）先初重相伝ユヘ、是ハ又重テノ事。偖、今日ノ相伝ハ誹諧ノ和名、本名ハヒナ哥ト云ノ伝、并ニヒナ哥ト云和名ニ誹諧ノ二字ヲ当ラレタコトノ伝、并誹諧二字ノ伝、次ニ言扁ト人扁トノ字論ノ事、是四ヶ條、今日ノ相伝ソ。但、此秘説ヲ知タ者、他流ニハ一向ナヒソナヒ（ママ）。其證拠ハ、今天下ノ誹人、大カタ美濃ノ支考カ説ニ惑ハサレテ人扁ノ俳ノ字ヲ書モノ多ヒ（虫損）。是テ見（虫損）レハ、言扁ノ故実ヲ知タ者ハ、天下三人モナイト見ルホトニ、他門ニ洩サヌ様ニシテ、随分大切ニ致ス事」（30ウ）ソ。

初重講義巻之一終　　」（31オ・裏表紙見返し）

（裏表紙）

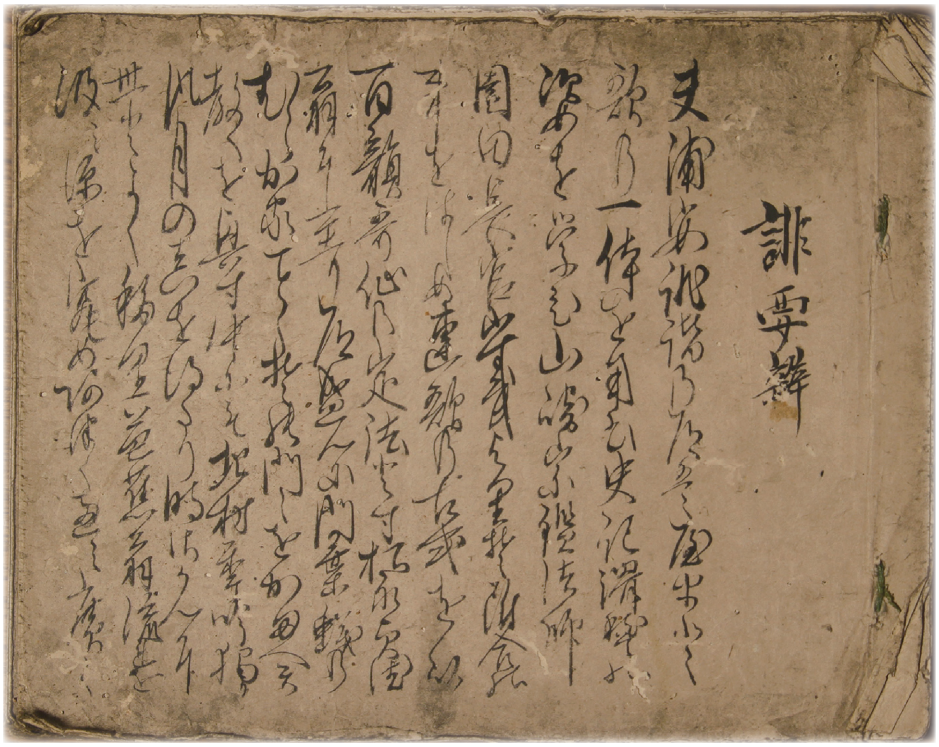
〈付記〉

本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に預かりました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

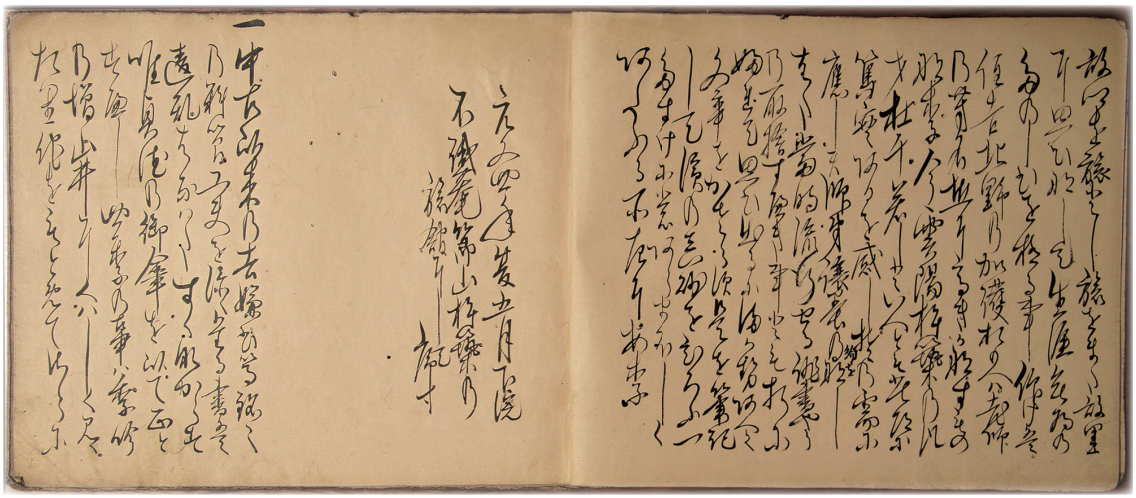
本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』――手錢記念館所蔵俳諧資料（一）――」（『山陰研究』第6号、島根大学法文学部山陰研究センター）に続く、島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」（二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美）、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」（代表・大高洋司）の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

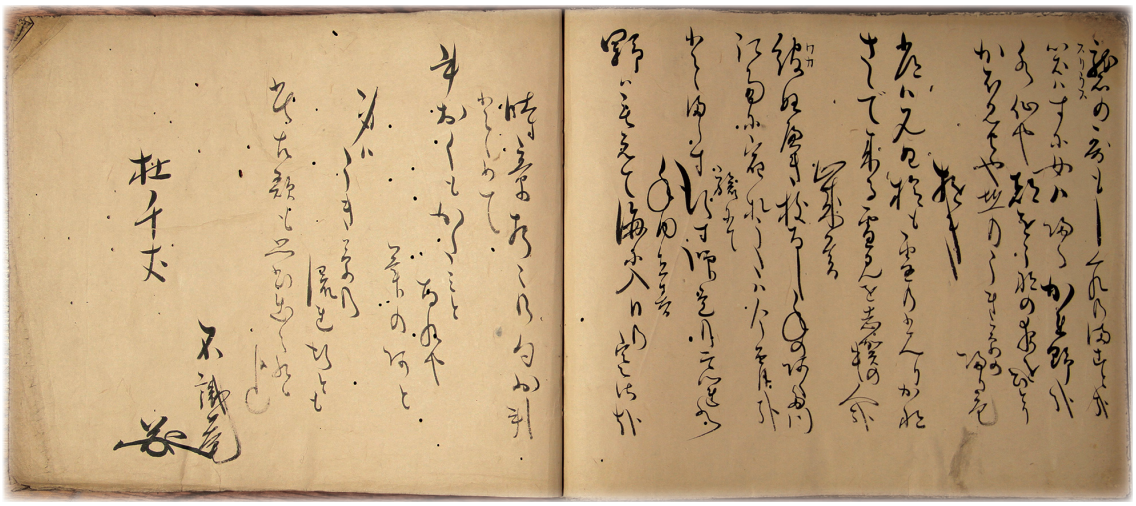
『誹要辨』巻頭



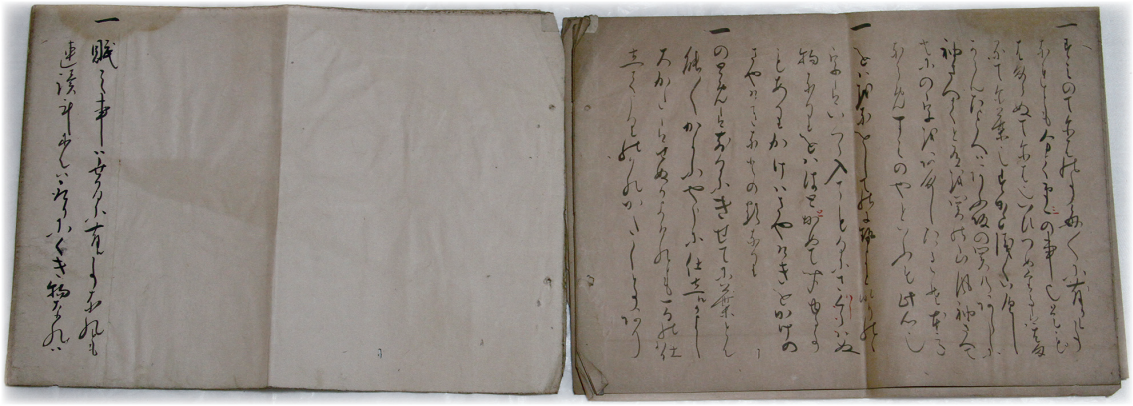
『誹要辨』（02ウ・03オ）



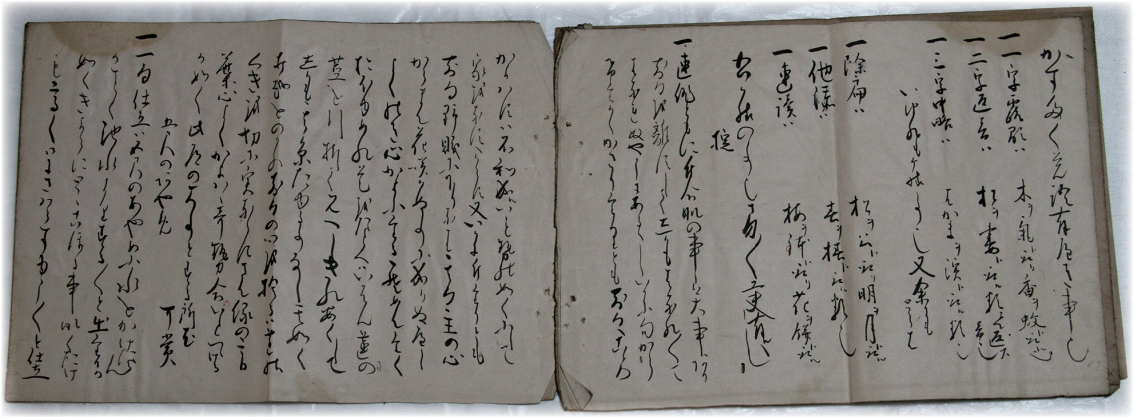
『誹要辨』（巻末）

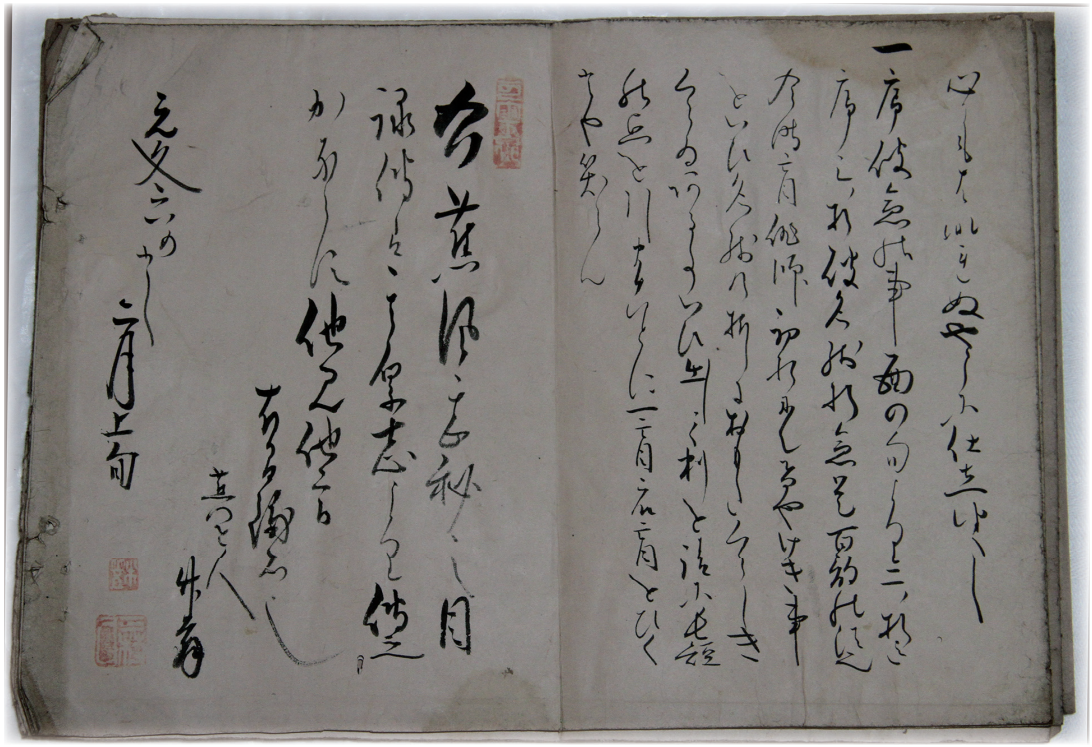


『〔竹翁伝書〕』（04ウ・05オ）

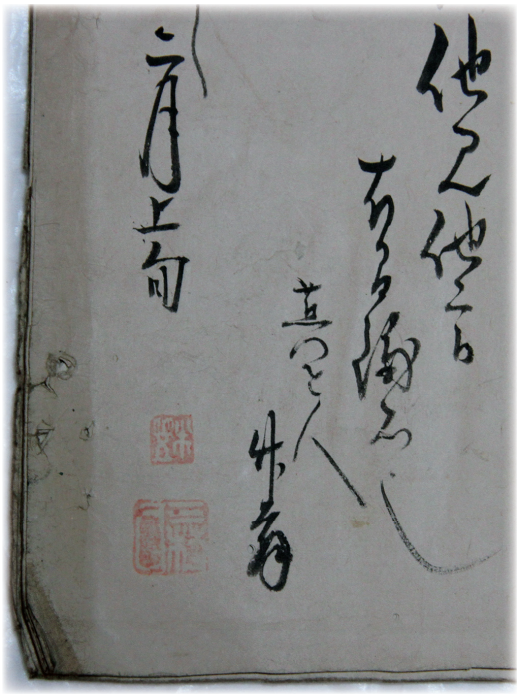


『〔竹翁伝書〕』（05ウ・06オ）

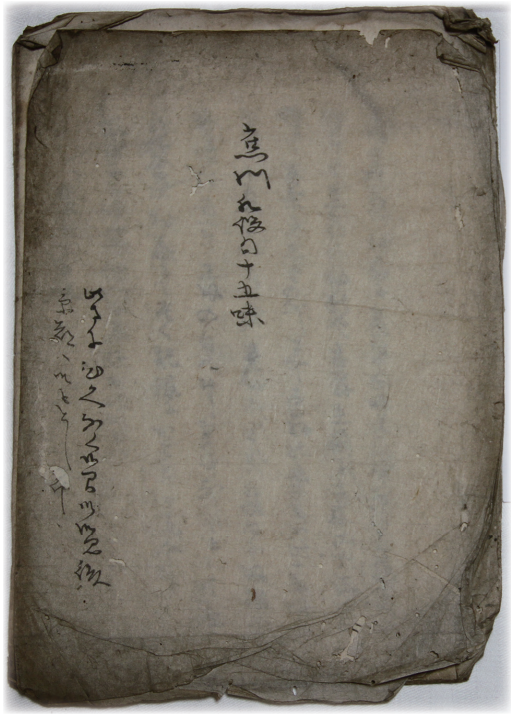




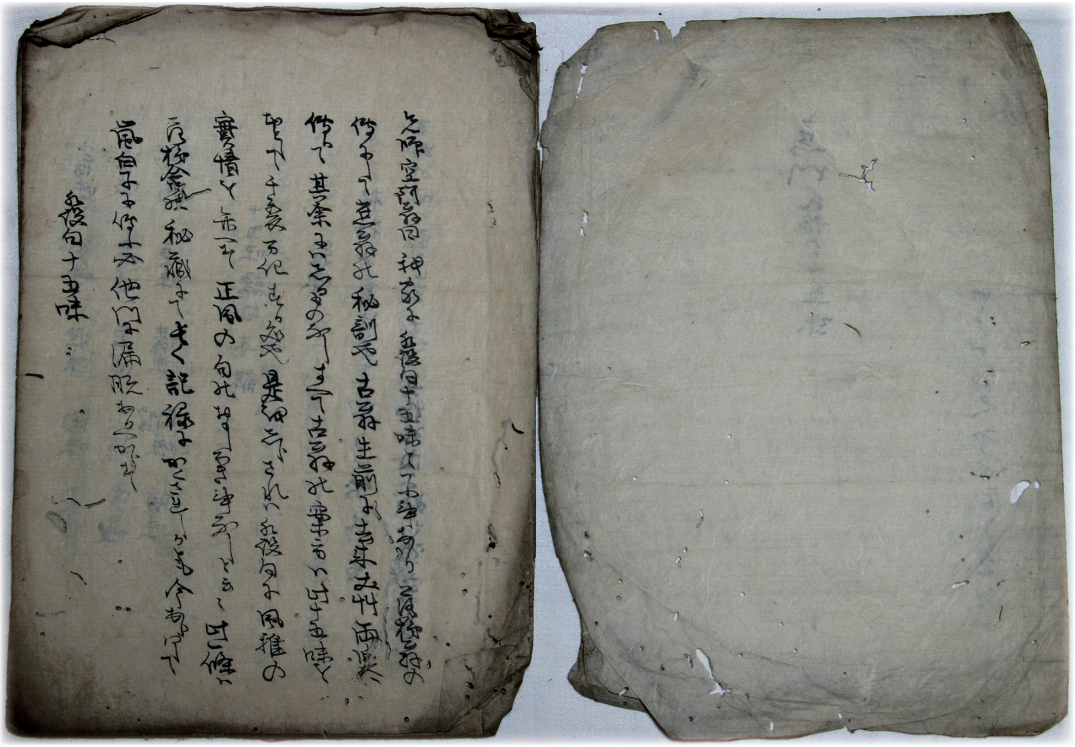
『〔竹翁伝書〕』（07ウ）



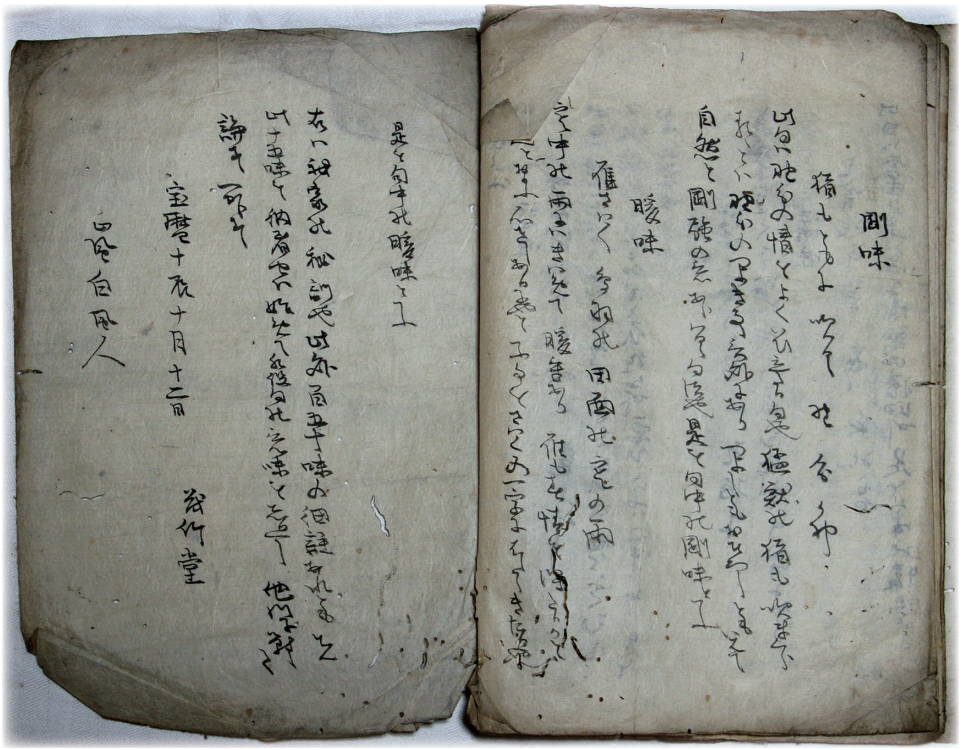
『〔竹翁伝書〕』（竹翁落款部分）



『蕉門発句十五味』（表紙）

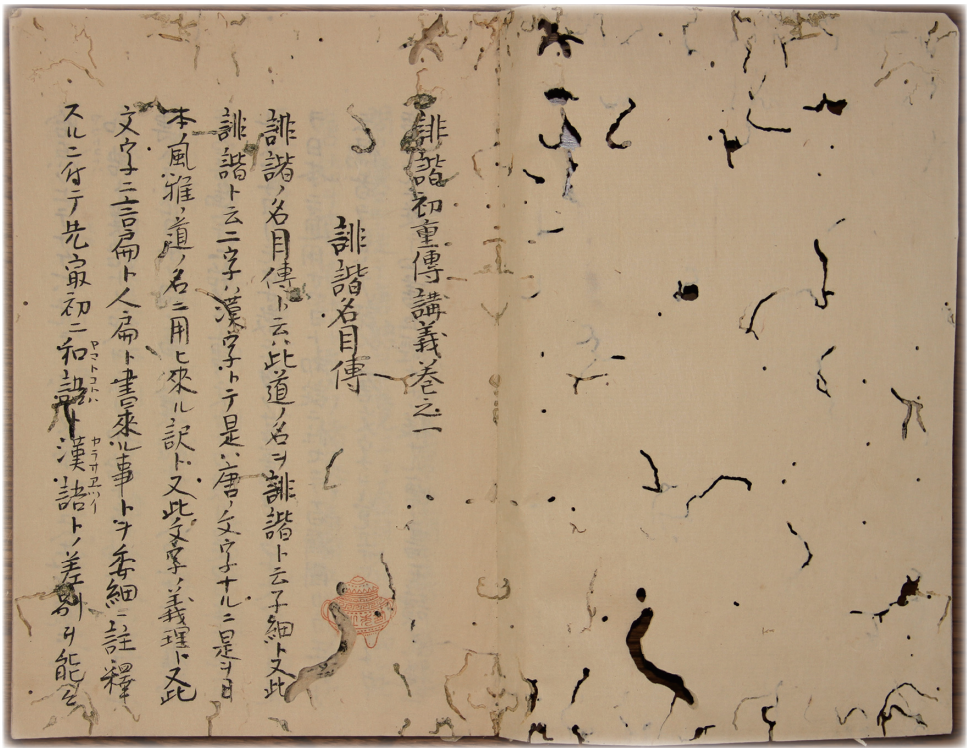


『蕉門発句十五味』（巻頭）

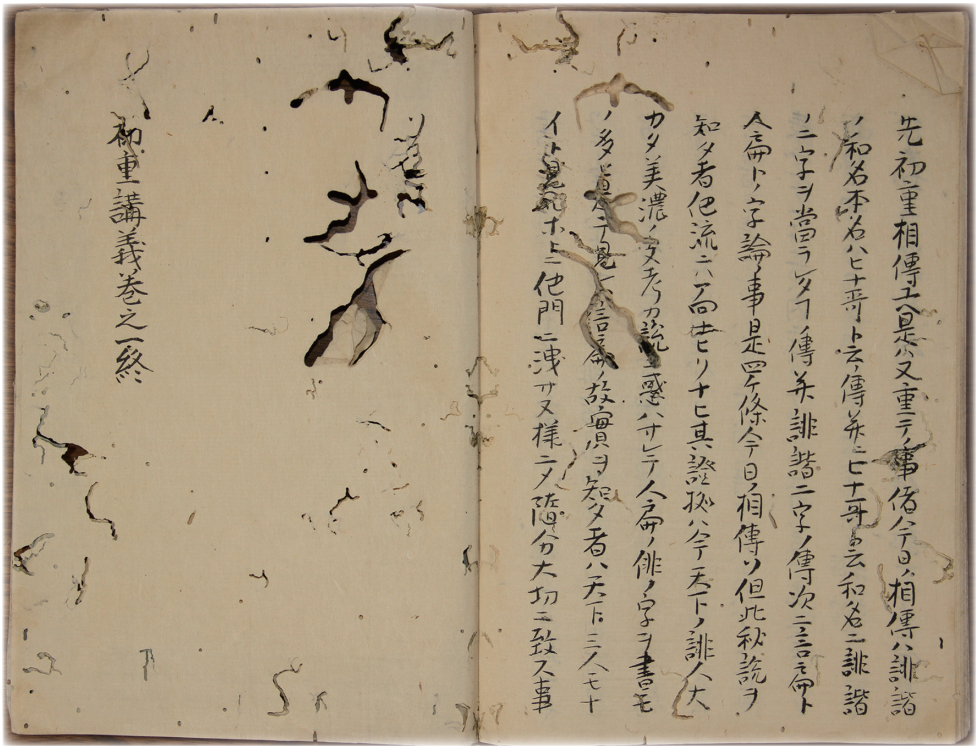


『蕉門発句十五味』（巻末）

『極秘 俳諧初重伝』（表紙）



『極秘 俳諧初重伝』（巻頭）



先初重相傳ニ是ハ又重テノ事ニ今日ハ相傳ハ誹諧
ノ和名不名ハヒ十哥ト云傳并ニヒ十哥ニ云和名ニ誹諧
ノ二字ヲ當テ又ハ傳并誹諧二字ノ傳次ニ言ヒ命ト
人命トノ字論事是ハ係今日相傳ノ但此秘説ヲ
知タ者他流ニハ高サヒリ十ヒ其證拠ハ今天下ノ誹人大
カタ美濃ノ文考カ説ニ惑ハサレテ人命ノ俳ノ字ヲ書モ
ノ多ク是人言命ノ故實ヲ知タ者ハ天下ニ人七十
イト見ルホトニ他門ニ洩サヌ様ニタ隠カ大切ニ致ス事

初重講義巻之一終